

ぴんぐわん おげん!

2019
-2020

上野国立美術館

OPEN

I 楽しい美術館

03	5年間の歩み「すごい」って言葉、すごくない? ————— 榎本 寿紀
	[みる、つくる、かんじる 美術体験プログラム]
05	朝のおとなの1010講座・夜のおとなの金曜講座
06	・4つの教材ボックス
07	・視るは楽しい教材ボックス
09	・大分県から絵の具をつくる
11	・美術からみた文化
13	・素材と技術
16	・Hands on Works
17	・番外編
18	公開ラボラトリー 教材ボックス、つくってます!
19	どなたでもワークショップ アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ!
25	みんなの土曜アトリエ
35	特別ワークショップ&レクチャー
36	・夏の特別ワークショップ 第一弾
37	・夏の特別ワークショップ 第二弾 手が語る
44	・美術館をめぐる7つのお話
45	・企画展「The Ukiyo-e 歌川派」関連ワークショップ&レクチャー ————— 宗像 晋作
49	・冬の特別ワークショップ 企画展「岡本太郎展」関連ワークショップ ————— 木藤 野絵
51	これからの美術館 ————— 榎本 寿紀
55	OPAMって、どんなところ? ————— 野上 智美
57	OPAMサポーター教育普及グループ活動
58	情報コーナー
59	教育普及グループ活動記録展示
60	今年度のトピックス

II 学校と、いっしょ

03	みんなが大人になったとき ————— 榎本 寿紀
	[スクール・プログラム]
05	コレクションから活動を振り返る《びじゅつかんの旅・旅じたく 小4ツアー》
06	・コレクション展Ⅰ 没後10年 岩澤重夫に捧ぐ ―自然との対話― ——— 宗像 晋作
07	・コレクション展Ⅱ エコール・ド・パリと竹 ————— 木藤 野絵
09	・コレクション展Ⅲ OPAMアニマル★パラダイス ————— 木藤 野絵
13	・コレクション展Ⅳ 福田平八郎 対 宇治山哲平 ―和洋の眼― ——— 梶原 麻奈未
17	・コレクション展Ⅴ 旅する美術 ————— 池田 隆代
21	・コレクション展Ⅵ 美の女神たち ————— 宗像 晋作
23	・とっておきの旅・旅じたく
24	ガイドスタッフ・引率教員研修
25	アウトリーチ 空を眺めて ————— 榎本 寿紀
27	来られないなら、こちらから行く《アウトリーチ・プログラム》
28	地域まるごと美術館【竹田展】 絵のなかの旅 ―ふるさと・名所・世界へ― 宗像 晋作
31	スクールミュージアム 姫島の色 ―海がつなく歴史と文化― ——— 菅野 剛宏
33	地域づくり講座 【国東市立安岐中学校】
34	アウトリーチ・プログラム
41	出前ワークショップで出会った子どもたち ————— 藤木 美里
43	いっしょに、やりましょう《先生のための講座》
49	大分県の図工・美術教育について／美術館のガイドスタッフ ——— 佐藤 収
53	実施一覧
59	大分県内アウトリーチ・フィールドワーク実施地図

たのしいびじゅつかん



3年目にもなると少し変化があらわれる。まずは赤ちゃんが増えてきたことだ。今まで参加してきた子どもたちに弟や妹ができ、一緒に参加するようになった。その結果、参加者が増えすぎたため、「みんなの土曜アトリエ」は限定30名とした。もともとこの講座は、身体と感覚を活性化する遊びと、作品を見ることを組み合わせた90分のワークショップ。作品をみんなで見るためには15名くらいが良いのではと設定していたが、いつの間にかママ友の口コミで広がり、30、40、50名と膨らんだ。しかもハイハイ、よちよち歩きの赤ちゃんもいる。このままでは展示室で作品を触ってしまうため、定員を決めざるを得なくなったのだ。一方、嬉しいこともある。自由に作品を見る子どもたちが増えてきたことだ。友達同士で、あるいは一人で、絵の前にじっと佇む姿があった。ただしこれは「みんなの土曜アトリエ」でのことだ。子どもだけで展示室に行くことはまだまだ少ない。やはり静まり返った展示室は、子どもたちにとっては異質な場所なのかも知れない。新講座「朝のおとなの1010講座」も始めた。教材ボックスから触る・触れる教材「Hands on Works」(p16-17)を発展させ、連続講座では身近な存在である植物をテーマに、植物学者からアーティストまで多彩な講師を招聘した(「植物をめぐる7つのお話」)。

さて、ここで別冊「大分県から絵の具をつくる」もみてみたい。「身近なものから色材を得る」として、教材ボックスの鉱物・植物・動物から得た色を、実験過程とともにまとめることができた。しかし記述に一部訂正が必要になったのと、他にもつくってみたい色ができ、終わりの見えない作業が続いてワクワクしている。

4年目の2018年10月には国民文化祭があった。期間中、教育普及グループは美術館でのワークショップは行わず、準備室時代のアウトリーチや開館以来の活動記録の展示を行い、その間、県内の地域へアウトリーチに行く。もともとアウトリーチは準備室時代から行い、それが発展した「びじゅつかんの旅・旅したく」も行ってきた(II「学校と、いっしょ」p.5-24参照)。将来的に美術館に来る人が増えてほしいからだ。

また別冊「色をめぐる7つのお話」として、7人のレクチャーの詳細をまとめることもできた。この「7つのお話シリーズ」は、美術に限らず、様々な分野を横断しながら、その道の専門家を講師に迎えて行っている。初年度「教材ボックスをめぐる7つのお話」、2年目「みる」をめぐる7つのお話、3年目「植物をめぐる7つのお話」、と続いた。4年目「色をめぐる7つのお話」は、教材ボックス、別冊「大分県から絵の具をつくる」、そして誰でも目にする身近なモノや生活に関するモノをテーマに開催した。この別冊を読むと、色をきっかけに、日本の歴史と文化、そしてサイエンスから絵画組成までを知ることができる。

大分県立美術館の教育普及のモットーは、身体と感覚を目覚めさせ、自分の回りの「すげえ!」に気づくこと。この「すげえ!」と出会うために、教材ボックスをつくり、ワークショップを行い、好奇心を刺激する。見る楽しさを知れば、自らが積極的になり、自分の視点ができあがる。この考えをもとに活動してきた5年目、2019年度の記録読本は2分冊にした。I巻は「楽しい美術館」編。ワークショップのタイトルは面白そうだけど、なかなか参加できないのもっと詳しい内容を知りたいという声に応え、ほぼ全ワークショップの内容を記した。そしてII巻は「学校と、いっしょ」編。小学4年生が団体で訪れるミュージアムツアーや、びじゅつかんの旅・旅したく、アウトリーチや遠距離で行う地域美術館体験講座について、OPAMコレクション展の紹介とあわせて掲載した。この1年間の活動をたっぷり見てほしい。

「びじゅつつて、すげえ!」は、人が言葉にならない感動を覚えたとき、つい言ってしまう「すごい」という言葉から生まれたと冒頭で述べた。30年ほど前、他館でワークショップを行ったとき、終わった後、ある男の子に「どうだった?」と聞くと、「すごすごい」と言った。こうしたことをサラッと聞いた彼がすごいな、と思ったのと同時に、うれしさがこみ上げた。以来、この言葉も、その時の彼のまっすぐな目も、頭から離れない。だからこの時の思いを胸に今まで活動が続けてきた。これからもそんな言葉が生まれてくることを切に願い、活動が続けていきたい。

5年間の歩み

「すごい」って言葉、すごくない?

大分県立美術館が開館したのは2015年4月24日。あっという間に5年の月日が流れた。この記録読本も5冊目を迎える。この5冊の背表紙を並べると、白い絵柄が大分県の地図になるのをご存じだろうか?実は2冊目をつくるときに、このまま毎年つくり続けるのなら地図にしようという話を持ち上がった。とうやたら地図ができるのか。あらためて背表紙を見ると、冊が進むたびにデザイナーが苦労を重ねていることがよくわかる。

さて、「びじゅつつて、すげえ!」は、人が言葉にならない感動を覚えたとき、つい言ってしまう「すごい」から生まれた言葉だ。記録読本の構想があがったとき、多くの人に美術の楽しさを伝え、美術を面白がるための本のタイトルは、これしかなかった。では開館してから5年間、教育普及グループはどんな活動をしてきたのか。今までにつくった「びじゅつつて、すげえ!」4冊と、別冊「大分県から絵の具をつくる」「色をめぐる7つのお話」を振り返りながら、概観してみたい。

開館時に、「モノと写真が語るこれからの教育普及」と題し、準備室時代に訪れた小学校の子どもたちの作品と記録写真、教材ボックス、講座で使用する道具や素材を展示した。これが、開館後の教育普及グループ最初の活動で、その後の教育普及の活動を示唆した内容だった。準備室時代は美術館から遠い所でのアウトリーチとともに、教材ボックスの制作に力を入れた。これは身近にある美しいモノの存在を知り、日常の再発見を促すことを目的に、県内全域の自然から「美のカケラ」を集めたのが始まりだ(詳細はp6)。美術は決して特別なものではないと感じてほしい。しかしモノだけ集めても、自分なりの見方や楽しみ方、自分の視点を持てないと、その美しさ、魅力には気づかない。そこでワークショップの開催につながる。内容は?対象は?人数は?身体と感覚を活性化させる体感ワークショップも、好奇心を触発し、歴史や文化、素材や技術を知る専門的な講座も必要だ。そんなことを実践していたら、いつの間にか数多くの講座を開くことになってしまった。その間、県内の小学生6万人全員を招待する小学生ファーストミュージアム体験事業も行った。できたばかりの美術館の活動を広く知ってほしい、記録読本にはワークショップのユニークなタイトルとともに講座の中身を詳細に書くことに努め、「全力で突っ走った開館後の1年」と書いた。

2冊目は、限られたページ数の中、多くのワークショップを開催しているという特色を強調するため、写真を多く、解説は少なくしたいと考えた。とはいえ開催している講座が多すぎるため、なかなか選ぶことが難しい。ここは厳選すべきか。いや多くのワークショップを開催しているのがOPAMの特徴だ。定番人気のものもあるが、常にできるだけ新ワークショップを考えている。ワークショップでの「みんなの笑顔」「作品に向けられる眼差し」、そして「作品の前で佇む姿」をキーワードに、写真、ヴィジュアルをメインにして楽しさを感じてもらおうと決めた。連続ワークショップ・レクチャー「みる」をめぐる7つのお話では、見る・観る・診る・看る・視ると、漢字で書くと様々な「みる」を、あらためて再考した。その講師の一人で九州自然動物公園アフリカンサファリの獣医師、神田岳委氏は、動物の表情やしぐさを感じてほしいと、日々の動物たちをTwitterで公開している。しかしそこに解説はない。その画像は見て感じることを大切にしている神田氏ならではのものはかり。神田氏の視点そのものも見逃せない魅力になっている。やはりヴィジュアルは大切だ。一方、視覚以外の感覚も大切なのは言うまでもない。何しろOPAMは「五感のミュージアム」だ。特別ワークショップ「音楽と美術のワークショップ」では、聴覚と視覚の関係を再確認した。教材ボックスの制作では、「みる」ためのきっかけとして青い色材・ブルジャンブルーを求めた。

みる、つくる、かんじる
美術体験プログラム

朝のおとなの1010講座 夜のおとなの金曜講座

お話から体験まで

「朝のおとなの1010講座」はその名のとおり、朝10時10分から始まる。10時の開館前から美術館入口で待っている参加者の姿を見るのは、とてもうれしい。また夕方6時を過ぎる頃、2階の情報コーナーにちらほらと人が集まってくる。「夜のおとなの金曜講座」に参加する人たちが。

この講座は、仕事や学校帰りに気軽に立ち寄ってほしいとの思いから、まず夜の講座がスタートした。好奇心を触発し、モノを見る楽しさを知れば、より美術館に足を運ぶ回数も増えるだろう。また夜の参加は難しいので、昼間にも開いてほしいという声にこたえ、朝の講座が開館3年目から始まった。

テーマは教材ボックスを中心に、「見るは楽しい教材ボックス」「大分県から絵の具をつくる」「美術からみた文化」「素材と技術」に番外編を加え、日常の中にある美術や美術作品のお

話を開催している。といっても、身近な美術から専門的な話まで多岐にわたり、能動的なアクションを伴うワークショップ形式のレクチャーだ。

開館当初は高校生から一般が対象だったが、中学2年生の男の子が大人に混じって参加したため、2年目から対象は中学生から一般になった。美術館近くの小学生もお母さんと一緒に参加し、この春から中学生になる。さらに夏休み、春休みには、大人に混じって私も参加したいという子どもたちが増えてきた。目下の悩みは大人の新しい参加者が増えないことだ。これには参加してみたいと思える内容を発信し続けることが大切だと思っている。1回限りでも、もちろん連続でも、楽しい内容をこれからも続けていきたい。

A ストーン・ボックス〜ミネラルからピグメント

大分県内から採集した土・石をもとにつくった顔料、県内の歴史的遺産で使用されたと推定される顔料や鉱物、およびそれらの色見本からなる、鉱物マニア必見のボックス。県内の顔料は10,000色を目指してコツコツとつくり続けている。

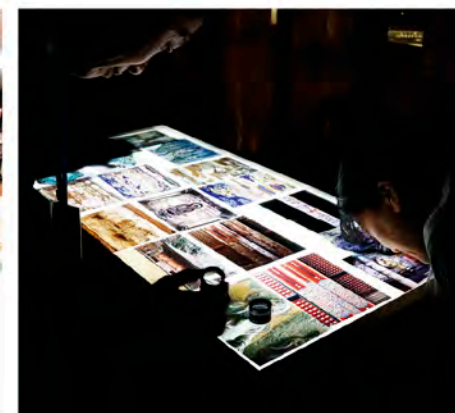


4つの教材ボックス

OPAM教育普及の教材ボックスは、身近にある美しいモノの存在を知り、日常からの再発見を促すことを目的に、美術館準備室時代から制作している。県内全域の自然から様々な美のカケラを集め、工芸品とその素材などを加えた4つのテーマからなる。実物資料をはじめ、素材、道具、画像などにより、身体と感覚に直接訴える内容とビジュアルで構成している。開館後は教育普及スタッフだけでなく、ワークショップ参加者やサポーターが、ある時は海へ、山へ、野原へ出かけ、ある時は自宅の庭で栽培して、様々な美のカケラを美術館に届けてくれる。こうして教材ボックスは進化と深化を続けている。

C CCボックス(calcium carbonate 炭酸カルシウム)

石灰岩・大理石・方解石など、建築の材料から画材まで、用途によって名前が変わる炭酸カルシウム。石・貝・卵など身近なものから鏝絵、漆喰壁(ともにレプリカ)までを集める。歴史的価値のある鏝絵や鍾乳洞などは画像で紹介する。



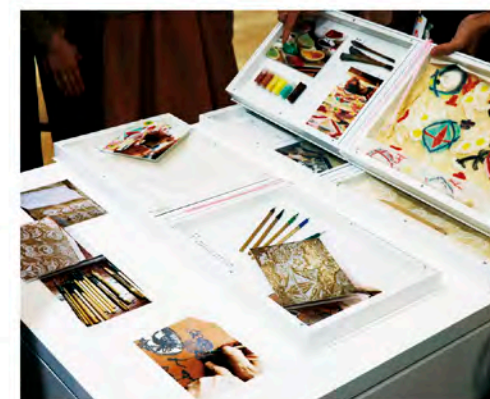
D マテリアル&テクニックボックス

素材と技術、手技と道具、そして作品と表現をテーマに、生活に関わる工芸・デザインからアートまでを取り上げたボックス。近年は視覚と触覚に訴える、触る・触れる教材「Hands on Works」を増やし、作家の言葉を交えて表現と技術の関係にも迫る。



B プラント&メディスン・ボックス

染料や顔料に使われる植物、竹工芸や木の器などの素材に使われる植物、生薬・漢方薬をはじめ生活に密着した植物、森や野原で見つける様々なタネなど、植物の特性や機能、形態に焦点をあてたボックス。藍や紅花は、ワークショップ参加者やサポーターが自宅で育て、葉っぱや花びらなど、染色の材料として持ってきてくれる。





見る
は
楽
し
い
教
材
ボ
ッ
ク
ス

まじりに進化中



染・植物の色 (金曜講座)

自然から色を得るための材料の中から、植物染料を紹介した。はじめに教材ボックスでは、奥に収納してあり見えづらい紫根や日本茜、紅花が登場。吉岡常雄氏・吉岡幸雄氏、そして山崎青樹氏の植物染料による染色実物見本も公開した。アウトリーチで行った佐伯市宇目の小学生が育てた藍と、校庭の植物を掛け合わせた絞り染めも、そのきれいに圧倒された。



木のぬくもり (金曜講座)

教材ボックスにある県内の雑木からなる木と樹皮見本、「Hands on Works」でもある県産材を使った器や箱など、大分県の樹木をたっぷり触った。木の種類によって色や模様、触り心地が違うのはもちろん、重さの違いにびっくりする。うっすら香る木のおい、なんだか心がなごんだ。



触ると触れる 美術と工芸 (1010講座)

触る・触れる教材「Hands on Works」から、井上雅之氏と中井川由季氏の作品を紹介した。今回は作品の素材や釉薬、道具から紹介し、その後しっかり手を洗い、数点を直接触る・触れる。二人の作品は期間限定で情報コーナーに展示した。



触ると触れる ガラス彫刻・形態と触覚 (1010講座)

植物の花粉や細胞など目に見えない命の在り方をモチーフに、ガラス彫刻を制作する美術家・青木美歌氏の作品を紹介した。粘菌の細胞のような作品は、細長いガラスの管をつないでいる。指先に神経を集中させ、そっと持ち上げると、あまりの軽さにびっくりした。命の元であり、循環をイメージさせる水のような作品に見とれ、思わず感動のため息が出てしまう。



器話(うつわはなし)① (1010講座)

器は、モノを入れる入れ物のことだけでなく、人や能力の大きさにも使う。また人が集まり円座になると、それは器のようにもなる。器の話は人の器から始まった。そして紙でできた空気の器、金属を叩いてつくる鍛金の器、プロダクトデザイナー小松誠氏による紙のように見える磁器、時松辰夫氏による県産材からつくられた魅力あふれる木の器を触りながら紹介した。



器話(うつわはなし)② (1010講座)

土器、陶器、炆器、磁器。4つの違いをスライドと実物資料で紹介した。実物資料は小鹿田焼、備前焼、唐津焼と、量産タイプの小松誠氏作「クリンクルシリーズ」の器。器を持って触って、重さ、触感から使い勝手を想像する。模様の付け方や、釉薬と自然釉の違いも、実物を触りながらだと想像しやすい。



虹の絵の具皿 (金曜講座)

宮沢賢治の「虹の絵の具皿(十力の金剛石)」は、2人の子ども(王子とお付きの者)が森の奥深くへ行く探検譚だが、そこに登場する様々な鉱物の原石と顔料、そして磨かれた石を紹介した。鉱物は磨くと宝石、砕けば顔料。机いっぱい広がった様々な石に興味がわいた。



オリジナル・トイに触ろう! (金曜講座)

教育普及には触って遊べるオリジナル・トイがいくつかある。竹を輪弧編にしてつくった「リンコちゃん」は、クルクル回すと竹編み模様が混ざりあう。竹をスライスした長さ180cm、幅5cm、厚さ5mmの「たけびよん」は、中心を持って上下させるとびよんびよん動き、しかも真ん中と両サイドに穴が開いているので、ボルトでつなげばオブジェになる。他にも「積み石」「竹積」「木っ端の積み木」があり、これらを出すときみんな目をキラキラと輝かせ、つなげたり積んだりしてトイに触った。時には子ども時代に返って遊ぶことも大切だ。



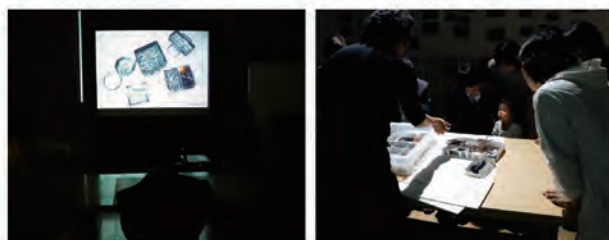
竹の表情 (1010講座)

真竹、孟宗竹、亀甲竹、胡麻竹、爆竹、ラッキョウ竹。教材ボックスから竹を取り上げた。これらの竹は、美術館準備室時代に手に入れ、ちゃんと油抜きもしてある。伐採から油抜きまでの作業の映像を交えながら、竹を切り、ヒゴを作る道具も触った。四つ目編、六つ目編、八つ目編、あじる編など、編み見本を紹介した後は、みんなで六つ目編にチャレンジした。



黒の素材 (金曜講座)

黒い絵の具は、使われた材料が色名になっているものが少なくない。「大分県から絵の具をつくるシリーズ」では、“豊後梅ブラック”“日田杉ブラック”“車エビシェルブラック”“関サバ ボーン ブラック”“イノシシ ボーン ブラック”など、大分県の植物・動物から炭と墨をつくってきた。しかし“車エビシェルブラック”を乳鉢で擦り、膠を混ぜてみると、少々ベタベタ感が残る。大分独自の色はきれいだ、絵の具としての描き心地は、まだまだだ。「大分県から絵の具をつくるシリーズ」は続く。



動物・植物・鉱物から！
大分県から絵の具をつくる

今年の藍色 (金曜講座)

美術館スタッフやサポーター、そしてワークショップの常連参加者は、毎年藍をタネから育てている。昨年の夏に収穫した葉っぱを乾燥させたものと、この日の朝に収穫した生の葉っぱを使って藍の染色実演を行った。生葉の上に布をのせ、静かにたたくと葉っぱの形が緑に写る。ミキサーにかけた汁に布を浸すと緑になる。ともに水に浸すと瑠璃色になった。一方、乾燥葉は薬品で還元して染色を行う。その時に採れる藍の華(表面に浮き出してくる泡)は顔料にもなる。藍の色はジャパニーズ・ブルー。みんな大好きだ。



江戸リップ (金曜講座)

開館初年度、ワークショップの参加者やサポーターに紅花のタネを配った。育てた花びらから絵の具をつくりたい。こうして育てた紅花からつくった色を紹介した。さて浮世絵や肉筆画にも登場する緑輝く笹色紅は、大分県で育てた紅花からできるのか？ 残念ながら量が少なく、笹色紅の制作はできなかったが、黄色色素を取り除いた紅の色は濃いピンク色となった(p60「今年度のトピックス」参照)。



松竹梅ビスタとセピアのインク (1010講座)

植物タールからつくるインク・ビスタは、14～19世紀にヨーロッパで流行した。世界の素描の本には、ダ・ヴィンチやレンブラントがビスタで描いた素描が載っている。このビスタを大分県の松竹梅からつくったものを紹介した。またセピアはイカ墨のこと。県内で捕ったイカから取り出した墨で絵を描いてみる。さらに同じく県内で捕ったタコの墨でも絵を描き、色を見比べてみた。しかしタコ墨は取り出すのが難しく、描画材には不向きなことが分かった。



崇高なる“紫” (1010講座)

紫は、赤と青の色を混ぜてつくるか、紫根から染めるか、貝紫から得るしかない。竹田市志土知の紫根、宇佐市のアカニシで染めた紫を紹介し、最後は大分市のイボニシから鰐下腺を取り出して直射日光で発色させる実演を行った。どれも驚きの紫だった。



パステル・クレヨンの魅力 (金曜講座)

スティック状の描画材にはいろいろあるが、コンテ、チョーク、パステル、クレパス、クレヨンの違いは顔料(色の粉)に何を混ぜるかで決まる。クレヨンに近い古典技法・エンカウスティック、16世紀頃から流行したパステル画をスライドで紹介しながら、県内から集めた顔料にトラガントゴムを混ぜてパステルに、蜜蝋(みつろう)を混ぜてクレヨンにする実演を行った。描き心地はまだあまりよくないので、これからの改良が必要だ。



赤と青 (1010講座)

画材屋も文房具屋もない時代、絵の具は天然の鉱物・植物・動物からつくられていた。その中から赤と青の絵の具を紹介する。赤は赤鉄鉱(ベンガラ)、辰砂(水銀朱)、日本茜、紅花。青は藍と、牛血からつくられるブルシャンブルー。準備室時代から5年をかけて、講座参加者やサポーターと一緒につくった赤と青を紹介した。



朝のおとなの1010講座 夜のおとなの金曜講座

パラパラ・カクカク・アニメーション (金曜講座)

バラバラ漫画を写真でつくったものが実写版コマ撮りアニメだ。参加者みんなで作るため、ポーズを取って写真を撮る。ちょっと動いて撮る。ちょっと動いてまた撮る。これを繰り返して連続してみると、みんなカクカク動くように見えるのだ。2017年3月に一日ワークショップで子どもたちがつくった「OPAM 観光、八百万のつくも神」と、プロのつくったいくつかの作品を見た。コマ撮りアニメは実に時間と根気のいる作業である。



写真との出会い① (金曜講座)

写真のもとになった暗箱・カメラ・オブスクラ。段ボール箱や紙管でつくった暗箱を覗くと、アトリエの風景がさかさまに映る。アトリエを真暗にして、隣の部屋を小さな穴からのぞくと、隣の部屋で手を動かしたり、ジャンプしたりする姿がアトリエ内のボードに映り、感動！興奮！



美術からみた文化

みるって楽しい



アートプロジェクトって何？ (金曜講座)

美術館やギャラリー以外で、美術に触れる場所ってどこでしょう？作品そのものよりも制作過程に注目したり、社会の中でアートを考えたり、アートを使って地域を活性化させる取り組み、アートプロジェクトを取り上げた。日本でもさまざまな機関や団体、そしてアーティストが活動するアートプロジェクトが展開されているが、その目的や活動の内容は様々だ。市民参加型の企画やアーティストが地域住民と共同する地域振興型などを紹介した。



遠くへいきたい (金曜講座)

旅をテーマに作品を紹介した。天正遣欧少年使節、イギリスからヨーロッパに向けての修学旅行であるグランドツアー、江戸のパワースポットや詣での名所、そしてイエスが生まれてエジプト逃避行。美術作品の中から、主に絵画に登場する旅の場面のいろいろを紹介した。



でか！誰が作った、何のため？ (1010講座)

地球をキャンバスにする？手が届かないくらい大きな彫刻や、環境そのものを作品にしてしまう大きな作品を取り上げた。ロバート・スミッソン、ウォルター・デ・マリア、クリスト&ジャンヌ=クロードなどのランドアートは、圧倒的なスケール感の作品群。なかでもクリストは、実現までのプロセス（過程）を作品と考えている。ただ大きければいいのか？との疑問もあるが、まずは自分の眼で見るのが大切だ。かかる費用と経済効果、社会とアートの関係も面白い。大分市の昭和通り交差点に「巨大寝ころび招き猫」も見てほしい。



手で考える (1010講座)

夏の特別ワークショップ「手が語る」にあわせ、手をテーマにした1010講座。手を動かしながら遊び、考える。まずはシルエットパズルからタングラム、清少納言の知恵の板、ピタゴラス、インサイトパズルと、カットされたピースを決まった形にすることにチャレンジした。これがなかなか難しく、思わず集中してしまう。時には正解を求めず、新しい自分だけの形をつくることも楽しんだ。他にも有機形態のカラフルなプレートや、竹を組み合わせてオブジェをつくる玩具も触った。最後はパズルや積み木をデジタル撮影してつくったアニメーションも見た。



人形(ひとがた)の佇まい② (金曜講座)

玩具として、モニュメントとして、鑑賞用として、様々なところに存在する人形ワールドを紹介する第2弾。街中で見つけたもの、博物館に展示されているものをはじめ、今回は紹介しきれなかった工芸や彫刻、そして現代美術で取り上げている人形(ひとがた)を紹介した。



手の表情 (1010講座)

手をテーマにしたもう一つの1010講座。初めに自分の手を徹底的に見つめる。そして西洋美術の作品に登場する手、日本美術に登場する手の絵画や彫刻を見ながら、その手の形を真似てみた。



大江戸散歩図鑑 (1010講座)

江戸の町はどんなところ？企画展「The Ukiyo-e 歌川派」にあわせ、浮世絵や屏風から江戸の町と生活を覗いた。現在の東京はビルが乱立して埋め立ても進んでいる。両国の花火大会は今も昔も大盛況。再現された日本橋や両国橋界隈、長屋など現在の街並みを見ながら、当時の生活に触れた。



塔のある風景 (1010講座)

はじめに岡本太郎の太陽の塔を取り上げた。参加者の中には1970年の大阪万国博覧会に行き、塔の内部に入った方もいて、当時の様子が盛り上がった。そして澄川喜一の東京スカイツリー、日本三名塔のひとつ法隆寺五重塔、建て替え中の薬師寺東塔を、形と構造、そして修復と色彩の観点で見ていった。



耳を澄ませば～音のカタチをみる (1010講座)

聞かれたことはあっても、聞いたことは少ない自分の心臓音。はじめに聴診器で自分の心音を耳に傾ける。かすかな音は集中しないと聞こえない。壁や床などに聴診器をあてながら、叩いてみると、素材の違いで音の伝わり方が異なる。さまざまな音を聞いた後、その音源を確かめると、金属をはじく、木を叩く、竹を振り回すなど、単純なモノだった。不思議な音、想像力を掻き立てる音、びっくりする音など、聴覚と視覚を刺激するワークショップを行った。



橋 真ん中を渡ろう！ (金曜講座)

半円の型の円弧に沿って木っ端を隙間なく並べると、木っ端のアーチができる。これが橋をつくる最も単純な方法の一つだ。橋のつくり方を確認した後は、高さ日本一の九重「夢」大吊橋をはじめ、鳥居橋、原尻橋、長瀬橋、轟橋、無明橋などなど大分県内の石橋、そして浮世絵や絵画に描かれている橋を紹介した。



アートプロジェクトって何？ II (金曜講座)

アートによる地域創生を紹介する2回目。鳥取県鳥取市内で行われている「ホスピテイル・プロジェクト」を取り上げた。ここでは空き家だった旧横田院院を使って、創造性を高めることやコミュニティの核となることを目指し、活動している。アーティストの招聘から制作・展示まで行うレジデンスプログラム、展覧会・パフォーマンス・イベントを行うギャラリープログラム、レクチャー、読まなくなったけど捨てられない本を集めた図書室など、多彩な活動を行っている。



朝のおとなの1010講座 夜のおとなの金曜講座

素材と技術

触れてみよう

染・捺染 (金曜講座)

染色のお話・実演シリーズ1回目。布に直接、色・模様をあらわす捺染を行った。捺染は版画でいうと孔版に属するシルクスクリーンだ。原紙を切り抜くカッティング法、特別な薬品で描きながら型をつくる描画法、光を使う感光製版の3つの違いを、実演交りに紹介し、反応染料を使って捺染を行った。顔料ではなく染料。透明性があり、色が重なる下の色が加算され、しかも布の風合いは変わらない。これが染料ならではの魅力だ。

染・抜染 (金曜講座)

染まっている布から色を抜いて模様をあらわす抜染。抜染の仕組みを体感するため、簡単なドローイングの実演から始めた。カラーインクは顔料と異なり、色を重ねたときの透明感がきれいで、にじみ・ボカシも自由自在。染料にとっても似ている。漂白剤をかけると、みるみる脱色されて白くなる。その後、藍で染めた布を還元して白く抜いた布や、五倍子を鉄媒染で染めた布から錫やチタンで着染したもの、絞った布や闊ふせした布の上から塩素で色を抜いた布を紹介した。ちょっと化学的で難しい？でもきれいな布模様に感動した参加者たちだった。

染・防染 (金曜講座)

染色の歴史は防染の歴史ともいわれている。日本では古来より、色のつかない部分をつくり、形模様を表す方法を継(ケチ)と呼んでいた。天平時代の“三継”と呼ばれた3つの防染技法は、罽継(溶かした罽が染料をはじく)、夾継(形を切り抜いた板で挟む)、縹継(糸で縫ったりくくったところが防染される)。室町以降に栄えた糊防染・型染もあわせて紹介した。

布を溶かす (金曜講座)

布を溶かして布をつくるとは？それはちょっと変わった方法だ。透かし模様をつくるオパール加工は、化学繊維のまわりをセルロース繊維でコーティングした特別な糸で織られた布を用いる。そこにセルロース繊維だけを溶かす薬品を使い、透かし模様をつくる。一方、水溶性不織布の上をミシンでパッチワークした後、水で洗うと縫われた糸だけでつながり、布になる。塩縮加工をはじめとした形状固定の方法も、教材ボックスから須藤裕子氏の布を交えて紹介した。

染・引き染 (金曜講座)

染料液を刷毛で染める引き染。色を差し込んだり、ほかししたり、にじませたりして染める実演を行った。張木と伸子を使って布を張り、引き染刷毛と摺込み刷毛を使ってグラデーションなど、専門的な道具とその使い方を紹介したが、今回美術館では熱いらずの染料、反応染料を使う。この染料は化学反応によって色が定着するため、計って溶かすだけの染料なので、誰でも手軽に使える。

染・浸染 (金曜講座)

染料液に布を浸して染める浸染。ムラなく染めるためには、液中で絶えず手を動かし続ける必要がある。熱反応で色が定着する染料(電熱器で温度を上げていく)と化学反応で色が定着する染料、両方の実演をしたが、地味な作業に驚いた参加者たちだった。

染織・はじまりの一步 (1010講座)

染色と織物について、歴史から技法までを3回に分けて紹介する連続講座の1回目。動物・植物・鉱物の天然繊維と化学繊維。繊維を紡いで糸にする。糸は編んだり織ったりして布にする。色模様のためには先染めと後染めがあり、後染めには捺染・抜染・防染がある。染織の素材と技術の話、実物見本を交えてレクチャーした。

染織・はじまりの二歩め (1010講座)

染織の話の2回目は、織りの話から始めた。組織図や縞、格子、緋、そしてオフ・ルームのつづれ織り。スライドで染めと織の作品、当館所蔵の古澤万千子氏と志村ふくみ氏の作品を紹介。教材ボックスからは古澤万千子氏の制作工程見本を紹介した。

染織・そして三歩め (1010講座)

染織の話、3回目。前半は天然染料で染めた繊維、糸、布を紹介する。教材ボックスの制作やアウトリーチ、ワークショップの中で染めたり織ったりしたもの、ウズベキスタンやベトナムなど海外でつくられた生地だ。ウズベキスタンの布はザクロをはじめ、植物染料で染めた糸を使って刺繍を施している。後半はOPAM所蔵の熊井恭子氏のオブジェやポーランドの作家・アバカノヴィッチ氏の作品など、繊維を造形のための素材の一つとしてとらえている現代美術作家を取り上げた。

手技、万歳!! (金曜講座)

教育普及には、本当に手につくっているの？と思いたくなる作品で、しかも直接触ることのできる「Hands on Works」がある。平らな金属を叩いてつくられた器、硬い石を削ってつくられた蛇の彫刻、ガラスを溶かしてつくられた繊細な彫刻は、どれもこれも、驚きの作品だ。ある時は触る・触れるという微妙な触覚感を味わいながら素材と技術の関係に迫り、またある時は作家の言葉を交えて表現と技術の関係に迫る。



朝のおとなの1010講座 夜のおとなの金曜講座

触れてみよう / 素材と技術



木版画の楽しみ方 (金曜講座)

企画展「The Ukiyo-e 歌川派」をより楽しむために、木版画を取り上げた。版画は凸版・凹版・平版・孔版という4つの方法に分類される。その中で木版は凸版に属するが、さらに木口木版と板目木版に分かれる。木口木版は木を切った断面、硬い木口を生かして線刻表現を行う。一方、板目木版は柔らかい板目に彫るため、面表現に適し、なじみ深い一般的な表現で、浮世絵の多色木版に使われている。企画展「The Ukiyo-e 歌川派」は、作品の印象や描かれているファッション、色からだけでなく、技法からも楽しめる。



ベトベト? ネバネバ? サラッと油絵の具 (1010講座)

油絵の具は、顔料に乾性油を展色材として使う。薄く溶いた油絵の具を乾かしては塗り、乾かしては塗りを繰り返すと輪郭線のない表現が描けるが、印象派や日本の洋画では大胆に筆のタッチが見られる。筆のタッチ、絵の具の塗り方の話をしながら、ガラス棒とガラス板を使って顔料とリンシードオイルを混ぜて練る実演を行った。大分県内の顔料を使った油絵の具の塗り重ね見本は顔料の粒子が荒く、グラデーションにはムラがある。これは近々再制作をする予定だ。



絵の具の表情 (金曜講座)

「岡本太郎展」に関連して冬の特別ワークショップ「絵の具と遊ぼう」「絵の具まみれ」を開催したが(p49-50参照)、これは主な対象は子ども。しかし、アクションペインティングをする機会のない大人も、絵の具をたっぷり使うと楽しいだろう。ぼかし、かすれ、ベタベタ。クレヨン、カラーインク、水彩絵の具、アクリル絵の具と、それぞれの画材の特性や現代絵画の作家の話とともに、ダイナミックな絵の具遊びを行った。



Hands on Works

青木美歌 Mika Aoki

美術家

1981年東京生まれ。2006年武蔵野美術大学工芸工業デザイン科ガラス専攻卒業。文化庁新進芸術家海外研修制度にて英国へ留学。Royal College of Art / Ceramics and Glassコース修士課程修了(英国・ロンドン)。目に見えない「生命の在り様」をテーマに作品制作。近年の個展では植物のライフサイクルをモチーフに、目に見えない「生命の繋がり」を表現している。



井上雅之 Masayuki Inoue

美術家・多摩美術大学美術学部工芸学科教授

1957年神戸市生まれ。1985年多摩美術大学大学院美術研究科修士課程を修了。1980年代から成形制作過程で現れる亀裂や破砕された欠片に興味を持ち、以後、陶を素材に立体作品の制作を試み、国内外の展覧会で発表。いくつものパーツを組み上げて構成し、大規模な作品を作り上げる。



中井川由季 Yuki Nakaigawa

陶芸家

1960年茨城県生まれ。多摩美術大学大学院修了後、1980年代から陶を素材に立体作品の制作を試み、国内外の展覧会で発表。作品は多くの美術館にコレクションされ、さらにコミッションワークも手掛けている。2018年、大分県豊後高田市長崎鼻に「花とアートの罅づくりプロジェクト2017-18」として「丸くなって寄り添う」「花にうずくまる」が設置された。



佐野藍 Ai Sano

彫刻家

1989年東京生まれ。2016年東京藝術大学大学院美術研究家彫刻専攻修了。神話や伝説に登場する幻獣やドラゴンをモチーフに彫刻を制作する。石の持つ幻想的な雰囲気惹かれ、大理石彫刻を行う。



Hands on Works

木島隆康 Takayasu Kijima

修復家・東京藝術大学名誉教授

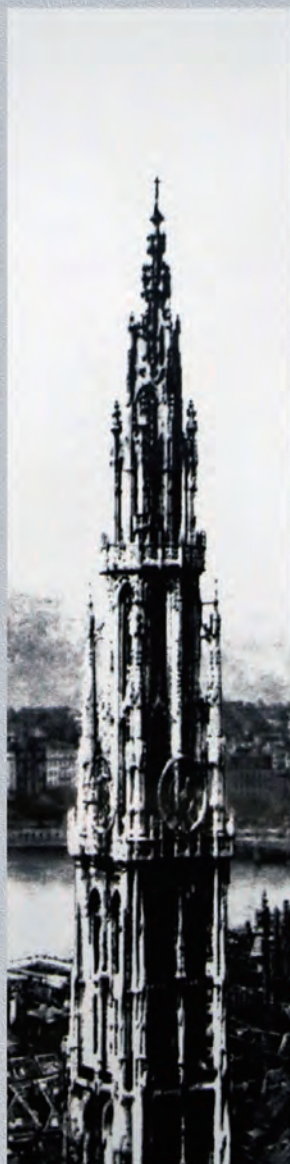
1951年北海道生まれ。創形美術学校修復研究所および修復研究所21にて油彩画修復に携わる。2002年より東京藝術大学大学院美術研究科保存修復油画研究室で、油彩画修復と金地テンペラの技術指導を中心に文化財保存分野の人材育成に携わる。2000年の「バリ日本館藤田絵画修復事業」に際し、修復家としてバリに派遣された。



小川信治 Shinji Ogawa

美術家

「世界とは何か」をテーマに、見慣れた風景や名画などを改変して時間や空間の構造を考察し、世界の可能性を提示する作品を制作している。名画から中心となる人物を消し去り、空白を想像力で補う〈Without You〉シリーズ、画面の中で有名な建築や人物を二重化して描く〈Perfect World〉シリーズ、モン・サン・ミッシェルのシルエットの中に様々な建築パーツを組み込み、架空の風景を描いてゆく「モアレの風景」などがある。



小松誠 Makoto Komatsu

プロダクトデザイナー
武蔵野美術大学名誉教授

1943年東京生まれ。1970年から3年間、スウェーデンにてスティング・リンドベリに師事。2008年東京国立近代美術館にて個展「デザイン+ユーモア」を開催。作品は、多くの人々から親しまれる温かみのあるデザインが特徴。代表作はクリンクルシリーズ。紙の質感を表現した陶磁器で、一見やわらかそうに見えるしわくちゃなデザインは暮らしにユーモアを加える。



番外編

いろいろやっています

愛のミュゼオロジー

2019年3月に退任した初代館長・新見隆の「愛のミュゼオロジー」。今年度は金曜講座と1010講座で合わせて3回行った。



竹を学んどう! (金曜講座)

5月に開催したメトロポリタン美術館所蔵作品による企画展「竹工芸名品展」に先駆けて行われた、竹についてのレクチャー。前半は展覧会担当の友永尚子学芸員より大分・別府の竹工芸について、後半は新見隆視点によるミッドセンチュリー時代の建築デザインの流れと竹工芸の関係性についての話だった。

利休についての大嘘 (金曜講座)

千利休は芸術家、日本で初めての学芸員。新見隆独自の視点での千利休についてのお話は、マルセル・デュシャンも登場して、過去と現代を行ったり来たりのレクチャーだった。



デュシャン・コンセプチュアルの王様 (1010講座)

トイレの便器が美術作品? どうしてこれが美術なの? 見えるモノと見えないモノ。マルセル・デュシャンについて、美術の歴史や哲学的な難しい話を交えて行ったが、身体でしっかり感じる事ができただろうか? なぜだか新見隆の視点で語られると納得する。

大人だって遊びたい! ころころピンポン (金曜講座)

身体と感性を活性化する体感ワークショップ「ころころピンポン」を「夜のおとなの金曜講座」で行った。初めはオレンジのピンポン玉約500個、そしてカラフルなピンポン玉約2,000個と戯れた。集中して遊んだ1時間はあっという間。こうした時間は、大人にも大切な。



公開ラボラトリー

教材ボックス、つくってます!

県内の土・石から10,000色をつくることを目指す顔料制作や、展色材を混ぜた色見本の制作、植物による染色や標本作成など、教材ボックスに収納する資料の公開制作を行っている。もともとは見学のみの公開ラボラトリーだったが、ワークショップの参加者が見学に来てそのまま手伝ってくれる姿が増え、頼もしい限りだ。今年度も少しずつだが進化・深化した。

顔料制作

顔料は、ハンマーで粉砕した石あるいは乾燥した土を、乳鉢ですり潰し、茶こしで粒子を整えながら、より細かくする。紗膜#300を通すとパウダー状になる。このまま小瓶に入れて教材ボックスに収納する場合もあれば、展色材を加え、色見本やパステル制作に用いる場合もある。準備室時代からコツコツと制作を続け、現在、小瓶に入れた顔料は1,000色を超えた。サポーター活動での制作とあわせ、地道な努力で少しずつ増えている。

一方、アトリエでの顔料制作は、制約が多いという残念な状況もある。ここは美術館。粉塵が館内に飛散しないように、ハンマーでの粉砕は別の場所で行う。そして乳鉢の数も制限している。つくることを楽しみつつ、顔料を増やしていきたい。



ケヤキを切る

美術館創作広場のケヤキを剪定しているのを発見した。断面を見ると何かに使えそうなので、枝を分けてもらい、虫食いや苔はカットした。将来的には美術館のケヤキで小さな器をつくりたいが、丸ノミや万力などの道具をそろえるのが難しい。もう少し先のことになりそうだ。数年後、ケヤキがもっと成長した時に、その木を使って何かワークショップができないだろうか。作業をしながら夢は膨らむ。



パステル制作

パステルの試作を行う。まずは型づくりだ。粘土で原型をつくり、OPAMの文字と、建物外観をイメージさせる斜めの線を入れた。パステルそのものをOPAMの建物の形にするのだ。石膏をかけて粘土を掻き出せば、雛型の完成。そこに顔料と少量の体質顔料を混ぜ、トラガントゴムで練ったものを詰めて乾燥させる。明るく淡い色のパステルが完成した。



その他

教材「Hands on works」の作品を収納する箱の試作を行う。作品を傷つけないよう、慎重、真剣、かつ丁寧に。採集物・収集物の整理もする。「なぜこんなものが?」と思うものもあるかもしれないが、どれも教材ボックスをつくるのに必要なものだ。ゴールデンウィークや夏休みなどの休暇明けには、講座参加者たちが見つめてきた貝殻、サンゴ、茜などが、次々と集まる。

染織のサンプル制作と講座の準備

公開ラボラトリーでは、サンプル制作など講座の準備も行う。そのほとんどは単純で地味な作業が多く、待ち時間も多い。同時進行でいくつもの作業をこなす。

シルクスクリーンの見本のために、版下を考える。身近な植物(日本茜や露草)にするか、子どものワークショップで描かれた幻獣にするかなど、迷いどころだ。版下ができれば、次はグランドワックスを引き、台紙に貼りつける。そしてカット。この作業については、開館時に小学2年生だった女の子が今や6年生になって、カッターを上手に使いこなし始め、頼もしい存在になっている。毎週のように来て、ニス原紙やステンシルシートのカットを続けてくれ、だんだん上達して速くきれいに仕上がるようになった。続いて防染の準備と、布を溶かして布をつくる準備も行う。特別な生地を使って透かし模様をつくるのだ。他にも型糊を置いた布を乾かして染色する、染色のための色と素材の見本を制作、ステンシル(型染)カット本番、反応染料の引き染見本のため中和剤を塗布しソーピングを施す等々、とにかく地味な作業が続く。



笹色紅づくり

江戸時代に流行った玉虫色に光る笹色紅の制作を試みた。しかしあまりにも紅花の量が少なくて、出来上がらなかった。残念ながら来年の制作に続く(詳細はp60「今年度のトピックス」)。



紙から布へ

和紙を布のようにする方法は二つある。一つは「紙衣」をつくる方法だ。こんにゃく糊や柿渋を塗って揉んでゆくと、耐水性の揉み紙になる。着物として、古くは平安時代から行われていた方法だ。数回繰り返して塗り、塗り重ね見本にした。

もう一つの方法である「紙布」は、和紙で糸をつくって、織る。この方法は時間がかかるが、紙衣と異なり、肌触りが良い。和紙を細長く切って、ブロックの上で転がしながら絡めていく。手で績む(よりあわせる)作業をすれば、やっと紡ぎ車を使って糸にできる。まだ織るには量が足りないが、糸づくりをしながら、大分県の植物繊維で和紙をつくれないうか考えた。夢は膨らむ一方だが、時間が足りず、まだまだ先のことになりそうだ。



みる、つくる、かんじる どなたでもワークショップ アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ！

展覧会を見に来た時、見るだけでなく、手を動かして何かをつくるという触覚的な能動体験が加わると、美術館に来た思い出が少し深くなるかもしれない。そんな思いから、子どもから大人まで誰でも気軽に参加できる「アトリエ・ミュージアム」を開催している。様々な素材に触ったり、描いたり、つくったりと日替わりメニューで、内容は当日来てのお楽しみ。どこにでもあるモノを使うときもあれば、とっておきのモノを使うこともある。

開館当初から開催しているが、このワークショップをきっかけに、「みんなの土曜アトリエ」や「特別ワークショップ」に参加する人が増えている。もともと展覧会を見に来たついでに寄ってほしいと始めたが、ここ数年はこのワークショップを目指して来館する家族が増えてきた。どんな内容か気にせず、美術館に行けば楽しいことが待っているという人が増えたことは、より美術館が普段使いの存在になっていることの表れだ。ワークショップをきっかけに、より美術館を身近なものとしてほしい。



ひらひら

ベースの花びら型を目安に、水性ペンのインクが水に溶けて広がる性質を利用して、クレヨンと水性ペンで模様や絵を描いて水を塗る。そこにカラーインクを垂らすと色が重なり広がってゆく。アイロンで乾かし、花びらの形に切ってくぼみをつくと、ひらひら舞う花びらが完成した。

ふあん・ふあん・ふあん (Fun・Fun・Fan)

いろいろな形にカットしたパネルから好きなものを3枚選び、絵を描く。穴をあけてストローでジョイント部分をつくり、リボンを通すと、変わった形のオリジナル扇子ができる。選んだパネルの形を利用して、どんな模様を描くかがポイントだ。



ぼこしろ 凹版画

凹んだところが白くなる。これを基本に、スチレンボードに突っ込んだものをさして凹ませる。あるいはひっかいて絵や模様を描く。こうして版画にするが、ポイントは、初めにいるるな形の中から3つのピースを選ぶことだ。その形と組み合わせによってイメージは膨らむ。刷り終わった版も作品の一部にしたい。



あみあみ小箱

細長くカットした色とりどりの紙を、竹工芸の四つ目編を基本に組んでいく。端を糊で止めながら立ち上げていくと、あっという間に小箱ができた。企画展「竹工芸の名品展」の開催中に実施した。



ステキなお団子頭

企画展「ムーミン展」ではムーミンの人気キャラクター「リトルミイ」のようなお団子ヘアで来館すれば団体料金で見られる「お団子ヘア割」があるが、「ショートカットなのでお団子ヘアにできない」という人のために、お団子頭をつくるワークショップを開催した。頭の形にあわせて筒状にした紙の真ん中を絞って、装飾すれば出来上がり。子どもから大人まで、この頭で「ムーミン展」を楽しんだ。



ステキなお団子頭②

「お団子ヘア割」にちなみ、「ステキなお団子頭」をつくるワークショップの2回目。今回は素材を変えて、ベースにオレンジと黄色の不織布を使う。赤毛と金髪のお団子頭が完成した。



アトリエ・ミュージアム・みんなでつくろっ!



天の川の水

小さなボトルに天の川の水をイメージして制作。周りにスパンコールや光る装飾を施し、中には星の形の切り紙や願い事を入れた。



てんてんアニマル

君は点々だけで、絵が描けるか?コレクション展「アニマル・パラダイス」に合わせて、好きな動物を点々だけで描くワークショップを開催した。チャレンジする人ははじめから点々で描き始める。難しいかな?と思う人は、輪郭だけを点で描いてある動物から好きなものを選んで描いた。



おばけのテッテテ

ビニール手袋にカラフルな紙を詰め込み、膨らんだ手の形に油性マジックで描いたり、カッティングシートを貼って、ハロウィンのお化けを制作。



アニマル★パラダイス

コレクション展「アニマル★パラダイス」にあわせて開催。自分で描いてもよし、用意した作品の動物の画像を使ってもよし。動物を紙から半分切り抜いて自立させる。積み木と積み石も用意しておき、森やジャングルも自由につくって遊んだ。



あなざーワールド

企画展「The Ukiyo-e 歌川派」に展示されている作品やOPAMコレクションの作品の写真から1点選び、紙コップの中に別世界をつくる。同じ作品を選んでも、まったく違う世界が出来上がった。



宇治山さん

宇治山哲平のアートペーパーを使ったワークショップをコレクション展IV「福田平八郎 対 宇治山哲平」にあわせて開催。このアートペーパーは、宇治山哲平の作品の一部をモチーフに、○や□がすぐに切り離せる。台紙に貼って色と形を楽しむんだ。



このき、なんのき?

ハガキほどの大きさの画用紙を上下半分に折る。下半分に木を描き、枝や幹の輪郭のアウトラインを切る。折って立ち上げると上部に木の影ができるので、この影に葉っぱや実が付き、花が咲いているように描く。

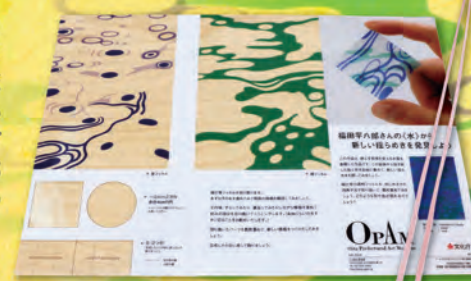


ピカテカ目印☆ トナカイさんの道しるべ

クリスマスのためにミニ・オーナメントを制作。アルミホイルを丸めてこすると光沢が生まれる。そこに油性マジックで色を付け、ドーナツ型にカットしたパネルに吊るす。もちろん回りはデコレーション。

水のゆらめき

コレクション展IV「福田平八郎 対 宇治山哲平」に関連して、福田平八郎のアートペーパーを使ったワークショップを開催。絶えず表情を変える水面を表現している福田平八郎《水》をもとにしたアートペーパーは、透明板に作品がプリントされている。この水面から気に入った部分を探し、重ね具合を考え、自分の水のゆらめきをつくり、首飾りをつくった。



いけいけ!おおはし

穴の開いた形を一つ選び、そこに橋を架ける簡単工作ワークショップ。これで誰でもすぐに建築家になれる。出来上がりをつなげると都市計画もできる。



ソリ工房 ~サンタさんへのプレゼント~

紙コップに切れ目を入れて、そのオブジェをつくる。切り込みの入れ方や曲げ方だけで、いろいろなデザインに工夫できる。



踊るペーパーモビール

今年度、毎月の講座のお知らせリーフレットには、「踊るペーパーモビール」と題したオマケがついていて、簡単なモビールの工作ができる。このモビールをつくるワークショップを、リーフレットから発展させて1年間毎月開催した。つくれるモビールは二つまで。そのうちどちらか一つはアトリエの天井から吊るす。OPAM5周年記念に合わせて、この「踊るペーパーモビール」がアトリエを彩ることになる。

リーフレットは、毎月、紙質が異なっているため、このペーパーモビールはベースとなる紙により、出来上がりの雰囲気も全く異なる。アトリエ・ミュージアムでは毎月、紙質と描画材をその時々形にあわせて考えている。それがこのペーパーモビールをアトリエ・ミュージアムでつくる醍醐味でもある。リーフレットを持ち帰り、そのまま切り離してつくってもよいが、紙にコピーしてつくるときは、ぜひ、紙質にもこだわってほしい。



April

基本形は円錐形がベースだが、色、模様はもちろん、組み合わせ方法や吊るす色紙も工夫する。



September

今回は、色は使わず白い障子紙のみ。クラゲのような形の紙に、針で穴を開けて模様を描いた。連結させると浮遊感が漂い、今までのモビールとは一風変わった出来栄となった。



May

切って、折って、組み立てると、六角錐を合わせた箱型になる。独自に切り紙細工のように細かい装飾を施す大人の参加者もいた。



October

とんがり屋根のような形をトレーシングペーパーで制作。半透明の紙に色鉛筆の柔らかさが絶妙なモビールとなった。



June

らせん状の線が描いてある色紙に、色鉛筆で色を塗ったり模様を描いたりしたあと、線のとおりに切ってひもで吊るせばできあがり。細かい柄を丁寧に描くお父さんの姿も見られた。



November

折り紙の裏に色や模様を描きこみ、線のとおりに切った後、ちぎれないように気を付けながらくしゃくしゃに絡める。表のはっきりした色と描いた模様が見え隠れする不思議なフワフワモビールができた。



July

一人6枚、楕円形が描かれている色画用紙を使う。今回のポイントは穴開けパンチが用意してあること。穴を開けると重なった色が見え隠れする。色紙のコラージュを楽しむ子どももいた。



December

円錐形の三連結。クリスマスツリーのイメージでの制作が多かった。



August

淡い色紙にクレヨンで模様を描く。その上から水彩絵の具を塗ると、クレヨンの線が浮き出て、ベースの色は色紙の色とともに混色される。色、形、模様をつけるのに、水と油の反応を利用した。



January

コピーしたペーパーモビールの裏側に、色鉛筆をたくさん使って色模様を描く。線に従ってカットして組み立てると、内側の色模様が見え隠れするモビールが出来上がった。



みる、つくる、かんじる みんなの土曜アトリエ

体験から鑑賞まで

「楽しい」「すごい」「面白い」。時間を忘れて夢中になったことは、身体の内まで刻み込まれる。「みんなの土曜アトリエ」は、身体と感覚を活性化する遊びと、コレクション作品を見ることを組み合わせた90分の美術体験ワークショップ。未就学児から大人まで、それぞれの視点で楽しめる、大分県立美術館ならではのプログラムだ。

午前中は4歳から6歳の未就学児とその保護者、午後は小学生から一般が対象だが、3歳以下の弟・妹、そして生まれたばかりの赤ちゃんまでが混じることも少なくない。定員はきびしく30名。開館2年目までは希望者全員を受け入れていたが、あまりにも増えすぎたため、このままでは展示室で作品を触ってしまうかもしれず苦渋の決断だった。前半の体験プログラムは、色や形、素材から空間までもテーマにしたダイナミックな活動で、身体も心も喜んだ後、コレクション展示室に行き、みんなで一緒に作品を見る。リラックスした身体と目覚めた感覚でコレクション作品を見ると、より感覚的に色彩や形態、素材をとらえることができる。子どもは全身で楽しさを表現し、昔子どもだった大人は忘れていた感覚を思い出す。誰かと一緒に展示室に行くことも、新鮮な体験だ。全身で感じる、見る、を繰り返す。美術に親しみながら自分の視点をつくっていく。将来的には一人で美術館を楽しむ姿が増えてほしい。

スズナリ

「金の鈴と銀の鈴、どっちがいい?」。新年度、初めての「みんなの土曜アトリエ」では、新・ワークショップ「スズナリ」を行った。一人一個の鈴を高く投げてキャッチ。指ではじいて転がす。二つ、三つと次第に数を増やし、数えきれないほど、床にばらまいた。お父さんが大量に集め、みんなの方へ一気に転がす。鈴しか使わないこのワークショップは、鈴と一緒に心も身体も鳴り響く。この日コレクション展示室で見た岩澤重夫《天響水心》と横尾龍彦《舞踏する混沌》は、まるで水の音、風の音が聞こえてきそうだった。



ころころチューブ

透明ビニールホースをつなげて、中にビー玉を転がすワークショップ。長さ60cm、直径5cmほどの透明チューブを一人一本。口にあてて声を出す。耳にチューブをあてて音を聞く。バランスをとって立てる。塩ビ管でつなげると、うねうね、ぐにゃぐにゃと、いろいろな形になった。そして中にビー玉を入れると、迷路のようなチューブの中を行ったり来たりする。午後は小学生から一般のコース。チューブをつなげた後、部屋を真っ暗にして蛍光ビー玉を使う。薄く光る蛍光ビー玉が転がった。展示室では小学生組と大人・弟妹組に分かれて散歩。紅葉いっぱい由布岳が描かれている岩澤重夫《晨》の前で合流した。



お絵描きデイト

青・未確認生物を創造せよ!

ラピスラズリ、藍銅鉱、孔雀石に目をキラキラさせる子どもたち。普段は中学生以上の講座で紹介するが、今回は特別に間近で見た。水に濡らすと色濃く見えるラピスラズリや、真っ青の藍銅鉱の結晶に、「おおっ!」と声が上がります。青という色は天の色、海の色。動物や植物などの生物界には多くは存在しない。鉱物の青を見た後は、青い生き物を想像して描いた。不思議な生き物を描くために、今日は色画用紙にクレヨンを使う。台紙の色を生かしたり、ぎゅぎゅ塗って尖った割りばしで削ってみたり。しばらくすると、たくさんの生き物たちが生まれた。3階コレクション展示室では、山や森、川が描かれている作品を中心に視た。





ゆらゆら、ぶらぶらのユサユサ

デコボコ、カクカク、グニャグニャ、何の形に見える？不定形にカットしたパネルを何かの形に見立て、絵や模様を描きながらつなげて吊るした。午後のコースでは、パネルのシルエットが何に見えるか想像し、表と裏は別の絵にして、アイデア満載のモビールをつくった。コレクション展示室では横尾龍彦の作品から、フワフワした形が何に見えるか想像した。

鏡ヨ鏡、鏡サン♡

鏡を使った数々の遊び。鏡を鼻頭の先にあて天井を見ながら歩いてみる。2枚あわせて隙間をのぞいてみる。3枚以上組み合わせて万華鏡のようにしてみる。部屋を暗くしてスポットライトを反射させてみる。ボールに映った自分の顔を見る。天井から「おたま」を吊ると、部屋のどこにいても映り込む。最後はみんなで記念撮影を行った。家でもできるので、ぜひ試してみてください。



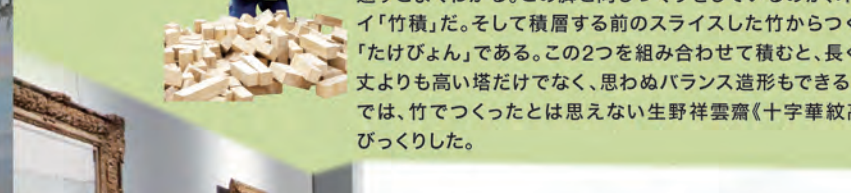
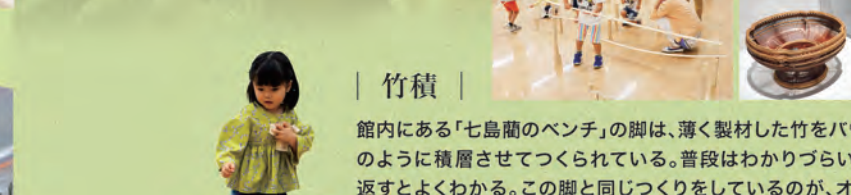
アニマル・チェアをつくらう！

チャールズ&レイ・イームズのエレファントチェア、柳宗理のエレファントスツール、バタフライスツールは座る教材だ。オリジナルタイプとリプロダクトタイプを見て触って違いを確かめた。そして館内にある様々な椅子も一堂に集め、座り心地を確かめる。次に椅子を動物に変身させる。色紙を切ったり貼ったりすると、優しいウサギ、ネコ、クマなどが出来上がった。展示室の散歩から戻り、最後にイームズ・チェアとバントンチェアに座って、お尻と足のフィット感を楽しんだ。



もひやもひやの森

紙をできるだけ細く長く切る。らせんを描き、線どおりに切る、またはジグザグに切る。天井から吊るし、照明や映像を投影し、水の流れや小鳥のさえずりの音を流すと、影がユラユラ動く幻想的な森が現れた。コレクション展示室は、全室散歩コース。川島茂雄《産霊》を寝転んで見上げたり、菊畑茂久馬《海道》を手のひらと指を筒状にして覗いてみたり、戸谷茂雄《森 2015 I》をしゃがみ込んで視ながらディテールに注目した。



みんなだって触りたい♡ いろいろな竹

勢いよく竹を転がして、カランコロンと音を響かせることからスタート。続いてオリジナル・トイ「たけびよん」を上下に揺らし、反り返る反動を利用して跳ねさせた。真竹、孟宗竹、爆竹、亀甲竹、ラッキョウ竹などいろいろな竹、四つ目編、六つ目編、八つ目編、網代編などの編み見本など、普段は「朝のおとなの1010講座」「夜のおとなの金曜講座」でしか紹介しない教材ボックスの竹を見た後は、オリジナル・トイ「りんごちゃん」に触った。コレクション展示室で竹工芸を見るときは、上下左右に身体を揺らし、モアレ模様を見て楽しんだ。午後の部では、輪弧編見本を見てからアトリウム須藤玲子《ユーラシアの庭「水分峠の水草」》を視る。そして六つ目編にも挑戦。展示室では技法に注目して作品を見た。



ふわもこ

開館前から入口にはたくさんの参加者が並び、10時5分には定員を超えた。「ふわもこ」はOPAM教育普及の人気No.1ワークショップ。定員30名を上回ってしまった場合の次回優先券「あばけん」も発行した(あばけんは「はいりきれない」を意味する大分の方言からネーミング)。直径8mの布を広げると、ふわふわ、もこもこ空気が入り込むことから名付けたが、その様子はまるで雲が膨らむようだ。布の上を歩いたり転がったり、ドーナツ型やお饅頭型、あるいはクラゲ型にしたり、ドーム状に膨らんだ布の中に入ることもできる。自分より大きく膨らむ布に、身体も心も躍るダイナミックなワークショップだ。このワークショップを行った後は、みんなリラックスして作品を見る。



ユラユラ・にゃんにゃん

竹ひこにネコの形の紙を貼りつけると、その影はユラユラとまるで踊るように動く。しかしこのままでは動かす人の影も映り込むので、ネコ耳もつけて装着、大きな布にネコの影絵を映し出した。コレクション展「アニマル★パラダイス」では福田平八郎と朝倉文夫のネコを視に行く。もちろんネコ耳も装着。動物モチーフを見るとは、視線をあわせるのと近寄るのが基本。寝ている？ 起きている？ どんな表情？ いろいろな発見がある。

壁ジャンプ!

お菓子の箱、OPAMオリジナルの積み木、そして紙コップを使って壁をつくり、ジャンプ、ジャンプ、ジャンプ。段ボールを重ね、天井に届くくらいのしっかりとした壁もつくった。しかも一度つくった後、離れてみて、傾き具合を検証。積み直しも行った。ジャンプするならお菓子の箱でできた壁がいいとの声も聞かれる。紙コップを積み上げると、絶対飛び越えられない大人の背丈よりも高い壁ができた。コレクション展示室では、福田平八郎《朝顔》をみんなで見る。これから咲こうとしている蕾、すでに開いている花、そして葉っぱの表と裏の描き分けなど、たくさんの発見があった。



リクエストにお応え☆ アニマル・チェア

春に実施した椅子をテーマにしたワークショップ「アニマル・チェア」を、リクエストに応じて行った。今回は動物いっぱいコレクション展示室に行くことができる。片目を閉じて手を伸ばし、手の上に動物をのせるようにして撫でるのが流行る。これは作品が身近に感じられる方法の一つだ。アトリエに戻り、椅子を動物に変身させると、みんなご機嫌になった。



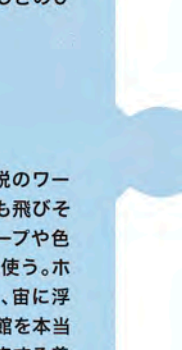
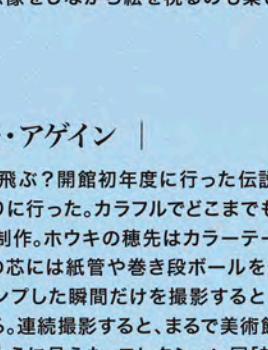
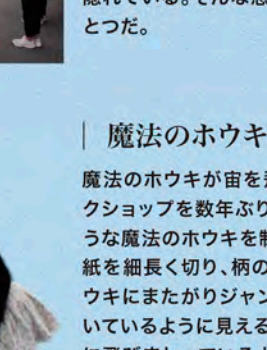
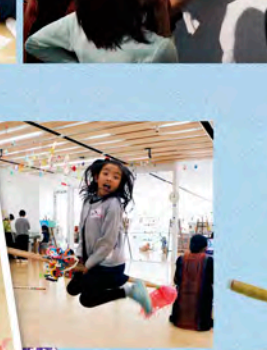
絵手紙を描こう!

情報コーナーに展示している井上雅之氏と中井川由季氏の作品を、展示ケースから出して触る・触れる。指先に神経を集中させて、そっと触り、やさしく両手で包み込んで持ち上げる。重さ・温度・触り心地を確かめた。ガラスやケース越しに視ていた時よりも意外とつるつる、ザラザラと、視覚と触覚のギャップに驚いた。最後に二人の作家に感想の絵手紙を描いた。



暗闇体験・七夕前夜祭

暗いところに長時間いると、だんだん目が慣れてきて、今までまったく見えなかったモノも見えてくる。初めは声が頼りだが、しばらくすると隙間から漏れてくるわずかな光だけで、回りが見えるようになる。その後は懐中電灯を持ち、部屋に隠れている動物やサンタクロース、UFOなどの搜索タイム。そして蓄光テープを小さく切ってアトリエに貼り、最後は電飾も灯して部屋中を星だらけにした。コレクション展示室では、パブロ・ピカソ《アンチープの風景》には山や道が描かれていることを確認。モイーズ・キスリング《ミモザ》は絵の具が盛り上がっているけれど離れてみるとフワフワに見える、東郷青児《手術室》は部屋がゆがんでいるなど、作品を視ながら話が盛り上がった。



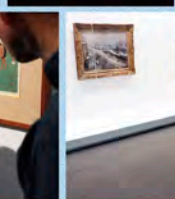
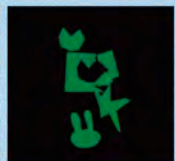
べっとんべとん

はじめに一人一つのセロハンテープを転がす、コマのように回す、頭にのせる。そしてよい部屋中に張り巡らせる。気を付けないと、身体にテープがついてしまう。部屋中、蜘蛛の巣のように張り巡らされたテープの上に、色紙を撒くと、花が咲いたようになった。最後は一つにまとめて大きなボール状にして転がすと、色が混ざりあって見え方が変わった。コレクションは「福田平八郎 対 宇治山哲平」。宇治山哲平《華厳 No.5》は、しゃがんで視ると、きらきら光る水晶末と方解末の結晶が見えた。



アニマル・ヴァレージ みんなの森

アトリエを丁寧に見まわすと、天井にいるネコ、ライオン、ウサギを見つけることができる。ここにはワークショップでつくった動物たちが潜んでいる。さらに電気を消すと他の動物たちも現れる。蛍光シールを使っているため、普段は見えないが、部屋を暗くした瞬間、天井や壁などいたるところで光りだす。ワークショップで動物を潜ませたあとは、コレクション展「旅する美術」に散歩に行く。今回は山に注目して作品を見た。描かれてはいないけど、山の絵だからこの中には動物も隠れている。そんな想像をしながら絵を視るのも楽しさのひとつだ。



魔法のホウキ・アゲイン

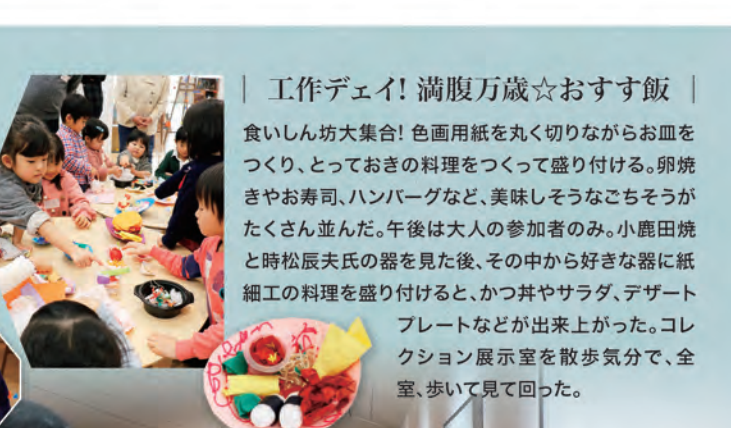
魔法のホウキが宙を飛ぶ?開館初年度に行った伝説のワークショップを数年ぶりに行った。カラフルでどこまでも飛びそうな魔法のホウキを制作。ホウキの穂先はカラーテープや色紙を細長く切り、柄の芯には紙管や巻き段ボールを使う。ホウキにまたがりジャンプした瞬間だけを撮影すると、宙に浮いているように見える。連続撮影すると、まるで美術館を本当に飛びまわっているように見えた。コレクション展「旅する美術」では高橋草坪《雪後騎驢図屏風》を視る。近くで視ると雪道を歩いている人や家の様子がわかる。離れて視ると遠くの山々や湖が描かれているのを発見した。その後は、自分が行ってみたい風景の絵を探した。



みんなの土曜アトリエ

宝石モザイク

石は磨けば宝石、砕けば顔料。教材ボックスから、天然の絵の具のもとである顔料を、原石、磨いた石板とともに紹介した。机の上に広げられた石はピカピカ光ったり、いろいろな色が混ざり合ったり、透かして見られるモノもある。小さな粒を拾い集めて、モザイク絵をつくった。コレクション展示室では、キラキラ光る岩絵の具に注目した。



工作デェ! 満腹万歳☆おすす飯

食いしん坊大集合! 色画用紙を丸く切りながらお皿をつくり、とっておきの料理をつくって盛り付ける。卵焼きやお寿司、ハンバーグなど、美味しそうなごちそうがたくさん並んだ。午後は大人の参加者のみ。小鹿田焼と時松辰夫氏の器を見た後、その中から好きな器に紙細工の料理を盛り付けると、かつ丼やサラダ、デザートプレートなどが出来上がった。コレクション展示室を散歩気分で、全室、歩いて見て回った。



カオカオ・ミュージアム@美の女神たち

真剣に鏡を凝視する。顔を白くする「カオカオ・ミュージアム」を久しぶりに開催した。白塗りしてのコレクション展示室。吉原真龍や上村松園の美人画の前で、ポーズや顔つきを真似てみる。マルセル・ワンダースの卵型作品では遠近法を利用して、頭の上に載せたような写真を撮った。



雪の結晶魔法陣

半分に、半分に、半分に折った色紙を切って広げると、対称形ができる切り紙細工。そして歯車を色鉛筆や色付きボールペンでくるくる回すと、いつの間にかきれいな模様ができる不思議なデザイン定規。できた形と模様を同心円状に並べて雪の結晶を投影すると、雪の妖精を呼ぶための魔法陣が出来上がった。コレクション展は「美の女神たち」。「2種類の着物を着ている人がいる」「大きい虫眼鏡?」「唇が緑色」「目が合ってこわい」。子どもたちの好奇心は止まらない。



MOFUMOFU♡ ヒツジ100%とまみれる

フワフワする羊の毛。たくさんの羊毛を全身に巻き付けると、とても気持ちが良い。空中に投げるとフワッと浮き、ゆっくり落ちてくる。みんなでやると、まるで雲が浮いているようだった。コレクション展示室では、眉毛と唇のお化粧に注目して作品を見ると、黒い歯や緑の唇を見つけた。桃の木の絵では、花弁と一緒に、濃いピンク色のつぼみを発見した。



みる、つくる、かんじる

特別ワークショップ&レクチャー

特別ワークショップ&レクチャーは、こども園や幼稚園、学校、そして個人ではなかなかできないダイナミックな活動や、専門的な内容を中心に開催している。日常的に開催している金・土・日曜だけでは物足りない、もっと集中したい、がっつり制作したい、長時間行いたいという人たちは大喜びだ。企画展に関連しているもの、外部からの講師を招聘しての専門的な話、作家の公開制作など、美術館ならではの様々な企画を行っている。

夏の特別ワークショップ 第一弾

「今年も“びしょぬれ” 白い服で集合」

昨年の夏に大好評だった「びしょぬれワークショップ」を、台風が接近する中、開催した。朝から霧雨が降っているが、びしょぬれになるので問題ない。雨の様子をみつづ細長い氷を滑らせる、水風船を投げ合う。透明ビニールシートをかぶったところにホースでジャンジャン水をかけ、すっかりずぶぬれになった。午後は10m四方の布を揺らしたり、潜ったり。天井に映る影を見ると、まるで水底から水面を見上げているようだった。透明ビニール傘は一人一本。コマのように回して遊んだ後、天井から吊るしてビニール袋を投げ入れた。コレクション展示室では作品に描かれた水に注目。最後は潜水ヘルメットをつくり、コレクション作品や水の映像を投影した布に潜ると、揺れる布とともに変化する傘の影が映り、まるで水中にいるようだった。



「摩訶不思議!? ようこそ、パラレル・ワールドへ」

石、紙、金属、布、発泡スチロールからスパンコールやビーズなど、いろいろな素材を使って、小箱の中に自分の世界をつくる2日間のワークショップを開催した。イメージを膨らませ、素材を触り、どんな世界にするかが決まったら制作開始。朝10時半から夕方4時半までの、たっぷりの時間の中、コツコツとひたすらつくる。途中、集中が切れたらコレクション展示室に行ったり、鬼ごっこをして遊んでから、制作続行。3つ目、4つ目とイメージが広がれば、どんどん世界も広がり、作品は増える。完成発表会では、カメラを使って細部を投影した。



夏の特別ワークショップ 第二弾

手が語る

美術の領域でメディアアートや仮想現実の世界が広がる中、身体と感覚を常に意識していないと、視ること、表現することのみならず、生きる力そのものが弱くなる。素材に触り、何かをつくることで、身体や脳を活性化すること、つまり「手で考える」ことは重要だ。身体と感覚と脳を活性化させる「手」は、視ること、表現すること、そして生きる力を取り戻すきっかけになる。「手」の再認識、日常の中で「手で考える」ため、特別ワークショップ&レクチャーを開催した。



OPAMの利岡コレクションにも作品がある小川信治氏を招聘。まるで写真のように描く超絶技巧の作品は、正面ではなく角度をつけて視ることで、黒鉛の輝きや筆圧による紙の凹み具合から、初めて描いた作品ということがわかる。その秘密に迫るワークショップ・レクチャーを開催した。

今回のために制作された新作「ダミアンのロンド」、OPAM所蔵の利岡コレクションの作品「Perfect World-440(PERFECT CATHEDRAL-9)(通天閣)」「PERFECT SOUVENIR KRAKOW」、そして(PERFECT World)シリーズから「パリの恋人」をじっくり視ることから始まった。「これは描いたの?」「写真でしょ?」。会場はすでにザワザワしている。小川氏は作品をつくるための考え方を、スライドや即興で描く実演を交えながら解説した。



そしていよいよ、小川氏による公開制作。参加者たちは息を止め、30分間集中して鉛筆の先端を見つめる。作品のコンセプトがとても面白いのと同時に、超絶技巧が大きな魅力。多くの作品を制作し続ける小川氏のエネルギーは底なしだ。今回は、公開制作という無茶な企画にに応じていただいた。2019年秋から2020年春にかけてポーランドの美術館で個展があり、準備が一番忙しい時期の貴重なレクチャーだった。

小川氏は、ワインボトルに即興で絵を描く。それも全国各地のワインを飲み歩き、その場で描くことをやっているそうだ。題して「円空プロジェクト」。ワインラベルへの描き足しはあまりにも自然で、どこを描いたかわからない。これを講座の中でも行った(詳細はp60「今年度のトピックス」)。

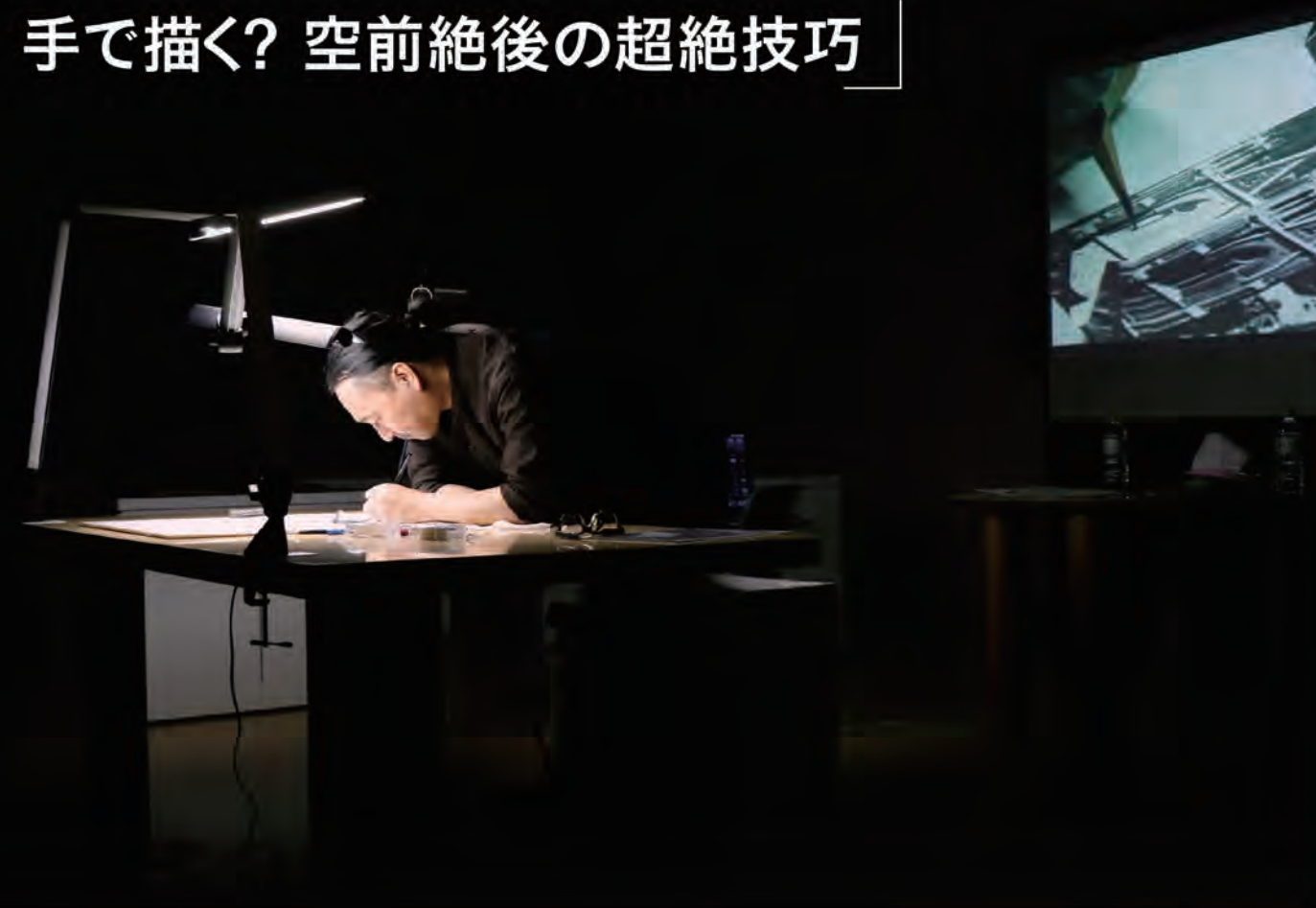


講師:小川信治(美術家)

「世界とは何か」をテーマに、見慣れた風景や名画などを改変して時間や空間の構造を考察し、世界の可能性を提示する作品を制作している。レオナルド・ダ・ヴィンチやフェルメールなどの名画から中心となる人物を消し去り、空白を想像力で補う(Without You)シリーズ、画面の中で有名な建築や人物を二重化して描く(PERFECT World)シリーズ、モン・サン・ミッシェルのシルエットの中に様々な建築パーツを組み込み、架空の風景を描いてゆく「モアレの風景」などがある。主な展覧会は「小川信治展 - 干渉する世界」(2006年 国立国際美術館、大阪)、「Shinji Ogawa - Realizm perwersyjny」(2008年 Bunkier Sztuki, ポーランド、クラクフ)、「小川信治展 あなた以外の世界のすべて」(2016年 千葉市美術館)など。

作家に触れるワークショップ・レクチャー

手で描く? 空前絶後の超絶技巧



「ダミアンのロンド」について

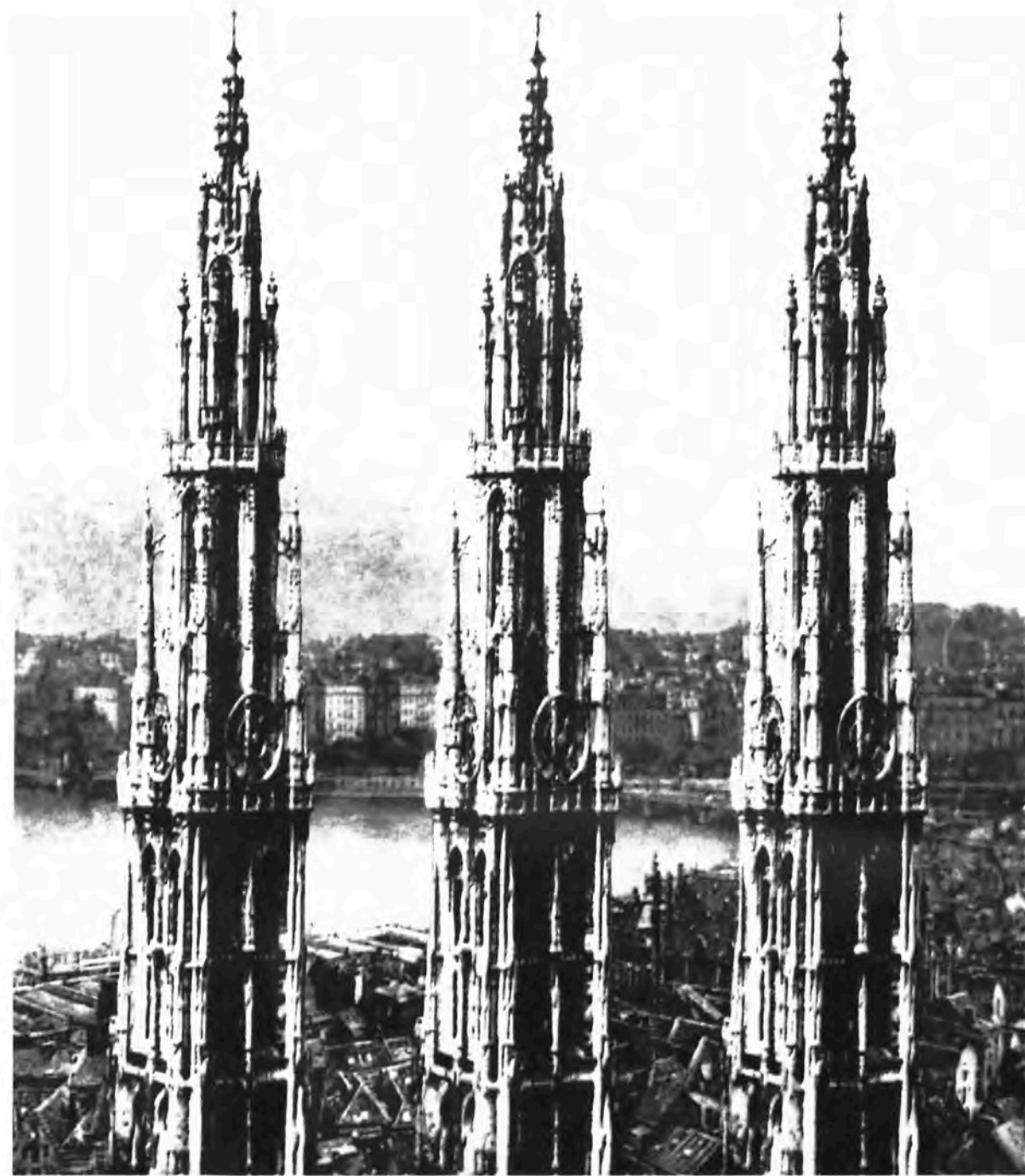
今回のレクチャーに伴い、小川氏に作品制作を依頼した。版画(リトグラフ)+手描きによる「ダミアンのロンド」だ。この「ダミアンのロンド」制作について触れたい。

小川氏はイタリアワインのダミアン・ボドヴェルシッチ氏から、ワインボトルのエチケット用に作品制作を依頼された。ダミアン氏から依頼があった時の条件は「3をテーマにしてほしい」ということだったという。その理由は彼が敬虔なカトリック信者であり、父と子と精霊の三位一体を象徴する数字としての「3」だそうだ。小川氏は〈Perfect World〉シリーズで古い絵葉書をもとに人物や建物を二つ並べて描きこみ、〈ロンド〉シリーズでは無限連続を表現するために風景を3回繰り返して描いている。「ダミアンのロンド」はそれらの中間的なシリーズを想定して制作してみようと考え、これまでに〈対称性/非対称性〉シリーズにおいて描いてきた左右反転したアントワープ大聖堂の塔を、3回繰り返して描いた。この鉛筆画を発展させ、リトグラフに手描きを加えるという。

制作プロセスは、鉛筆で描いた原画を写真撮影し、デジタル写真データー化する。そしてパソコンで一部を削除して、それをもとにリトグラフをつくる。最後にリトグラフから抜けている部分を鉛筆で描いて完成させるというものだ。当初のアイデアでは、レクチャー当日に完成させる予定であったが、時間内に仕上がるかあまりにも不確定な部分が多いので、進行を変更し、当日は完成した作品(写真右)を展示。「ダミアンのロンド」はリトグラフの試し刷り(写真左)も小川氏に寄贈していただき、制作の過程を残すことができた。

終了後、小川氏に大分県の風景を取り込んだ作品をもう1点制作できないかと相談すると、快く引き受けてくれた。今まで撮りためた大分の風景写真を見直し、展望の開けた場所で再撮影。わくわくしながら写真を集めて送ると、しばらくして制作途中の作品写真が届く。

この作品が完成したら、「Hands on Works」の「眼で触るシリーズ」として、ワークショップやアウトリーチで活用していきたい。

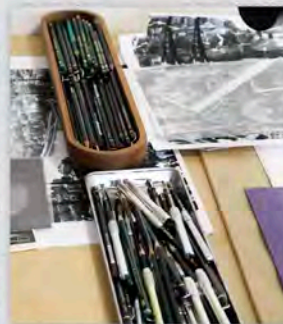
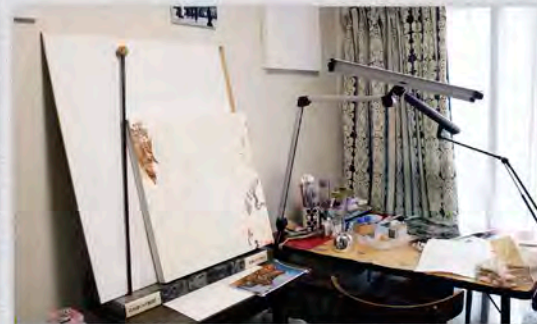
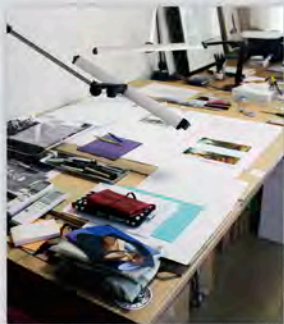


小川信治「ダミアンのロンド」〈ロンド〉シリーズ 2019年 56.0×76.0cm BFKリープ紙にリトグラフ、鉛筆

Studio アトリエ



ワークショップ・レクチャー終了後、作品の返却のために名古屋のアトリエに伺った。アトリエは鉛筆画を描く部屋と、油彩画を描く部屋の2つに分かれている。鉛筆画を描くアトリエには、描きはじめの作品や絵のイメージを固めるための写真、ドローイングが並んでいた。机の上には何本もの鉛筆と指サック。小川氏は筆圧が強く、すぐ指にマメができてしまうため、この指サックが欠かせないそうだ。油彩画のためのアトリエは、片面の壁が画集や本で埋まっていた。ちょうど制作を始めたばかりの〈Behind You〉シリーズのキャンバスが立てかけられている。イメージを練ったり、描いたりするのは同時進行で複数を手掛けるという。集中して制作が始まると空気が一変するのは想像に難くない。



手の機能から、形の必然性に触れるワークショップ・レクチャー

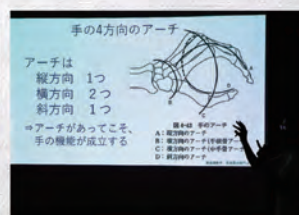
手を解剖する 機能と役割

作業療法士の岡田美佐子氏を招聘、手の機能から、形の必然性に触れるワークショップ・レクチャーを開催した。参加者同士、手をつないだり、ひたすらみんなの手を見比べたりと、コミュニケーション・ゲームを行いながら進行。ハサミで紙を丸く切るという単純な方法で、手の機能と感覚も再確認した。骨格や関節など、手の解剖学的側面はスライドで解説。最後はOPAMコレクションをはじめ、描かれた美術作品の手から表情を読み取る。知っているようで知らない自分の身体が、浮き彫りになったワークショップ・レクチャーだった。



講師：岡田美佐子（作業療法士）

東京都立小児総合医療センターにて、児童精神科の作業療法に関わる。解剖学・生理学・運動学・作業療法治療学で「手」の機能の可能性を知り、作業療法を通じて手の障害・運動や手の不器用さなど、「手」にまつわる様々な問題に関わる。仕事を通じて得た「手」の知識を美術に還元することを考え、絵を描く人・モノを創る人など美術に関わる人・興味ある人たちに、「手」を知ってほしいと考えはじめ、ワークショップ形式による「手」についての話を、美術大学や高校で行うようになった。



講師：盛田亜耶（美術家）

解剖学に興味を持ち、樹木と毛細血管の形態が類似することなど人間の身体と動植物の形態が相似するところから、人間と動植物が一体化するイメージを創造している美術家。自分で描いた素描を下地として超絶技巧の切り絵を制作している。2016年の初個展で名画の中の身体をテーマに連作をはじめ、2017年の東京藝術大学大学院の修了制作で、「生命の連鎖」の大作3点を発表。他にレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」から手だけを切り取り表現する組作品（2017-2018）がある。暗喩に満ちた独創的な世界を、1枚の紙からカッター1本で切り抜き、緊張感に溢れる作品を制作する。



じゃんけんのイロ・カタチ

作家に触れるワークショップ



子どものワークショップでは、美術家の盛田亜耶氏を招聘。盛田氏は切り絵の手法で、西洋絵画の名画に登場する「手」をモチーフに作品を制作している作家だ。初めに指の長さや手のひらの大きさを友達と比べてみる。関節に注目して曲げたり伸ばしたり。指紋や皺も丁寧に見た。そして絵の具を手につけて、これらを写し取る。しかしパーはいいが、グー、チョキは意外と難しい。蛍光カラーも使ってブラックライトで光らせたり、ボンドを混ぜてテクスチャー感をつけたりしてみると、様々な手の表情が生まれた。

盛田氏の作品をスライドと実物で見ると、1枚の紙からできているとは思えないほど、細かくつくられていた。ワークショップの最後には、カッターでの切り取りにも挑戦。写し取った自分の手形をカットして、自分の手の形、グー・チョキ・パーをつくる。大きく拡大投影しながら「じゃんけん大会」を行った。



こどもワークショップ

「手を握り出す」



小学校高学年の子どもたちを対象に、石膏を使った本格的型取りのワークショップを開催した。まずはスプーンを叩いて石膏ペラをつくることから開始。ひたすら金づちで叩いて平らなペラをつくった。そして普段はスタッフが行うビニールシート養生も、みんなできっちり行う。道具の制作から始めて、自分の手に直接石膏をかけ、割り出しまで6時間+α。時間内に終わらず、苦労したが、割り出した石膏から自分の手が見えた瞬間、みんなの顔に驚きと喜びがこぼれた。

ファミリーワークショップ

「踊るアニマル・ハンド・パペット」



コレクション展「アニマル★パラダイス」から好きな動物の人手形をつくった。手にはめて少しずつ動かし、デジタルカメラでコマ撮り撮影を行う。踊るように動くアニメーションができた。

ファミリーワークショップ

「今日の私の“手”」



自分の手を型取りした。型取り剤の中で3分間、少しでも手を動かしてはいけない。5年後、10年後、30年後まで大切に、その時の自分の手と比べてほしい。

この夏は、手いっぱいワークショップだー！

アトリエ・ミュージアム
夏休みスペシャル

展示会を見に来た人が手を動かすことで、来館の思い出が深くなるように行っている「アトリエ・ミュージアム」。夏休みスペシャルの3日間も「手」をテーマに行った。

指人形でつくる

ハッピーカムカムアニマル



いろいろな動物を指人形で制作し、指に装着する。右手、左手の各指につけると自由に動かせるため、招きネコなど動きを伴いやすい動物が人気だった。

ゆびがふで



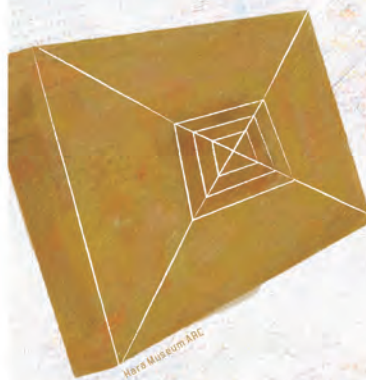
文字どおり、指を筆にして描く。ただし使うのは絵の具ではなく、色鉛筆の芯を削った粉。指で紙にこすりつけると、周りがぼけるやさしさうな絵が描けた。

手日記



手のひらにカラフルな食紅をぬり、紙の上にダイレクトプリント。黒いのは墨汁。皺や指紋も写せるので、重ねて写すとより重厚感のあるマチエールになる。今日の日付とサインはもちろん、好きなモノや夏の思い出を回りに描いたり、自分の手のサイズを測って書いたりした。今日の記憶が自分の手形と一緒に1枚になった。

Seven stories around the art museum



其の一

アートが変わった
美術館の変わる日

講師：加藤康彦

佐伯市大手前開発推進室参事
前大分県立美術館副館長



アートを専門家だけが話す時代ではなくなった。これからは市民が主役の文化施設となり、それをどう面白がるかが大切だ。

其の二

美術館はどこから来た
のか、美術館は何者か、
そしてどこへ行くのか

講師：川浪千鶴

元高知県立美術館企画監兼学芸課長
フリーランスキュレーター



被災した地域の美術館が、「美術館を美術館として開ける」「私たちは再開を許された美術館です」と発信している。

其の五

現代美術の
楽しみ方

講師：青野和子

ハラ ミュージアム アーク 館長



現代美術は自分の目で楽しむこと。所蔵作品と建築について聞く。週末に行われる開架式収蔵庫の見学ツアーは羨ましい。

其の三

コレクションに耳を澄ます
ブリヂストン美術館から
アーティゾン美術館へ

講師：貝塚健

石橋財団アーティゾン美術館
教育普及部長



実業家・石橋正二郎が集めたコレクションと、鑑賞プログラム「コレクションに耳を澄ます」について語る。

其の六

第三世代の美術館と
これから

講師：米田耕司

長崎県美術館館長



美術館に来る多くの人は、子どもの頃にも来たことがあるという事例や、美術館で絵を見て自殺をやめた人の話など、脱線しつつも面白い。

其の四

街・人とアート
美術館の役割

講師：菅章

大分市美術館館長



作家活動、美術教員、そして美術館・学芸員の仕事と、多くの美術領域を横断した個人史から、アートとの出会いについての3時間。

其の七

美術の境界線を
いったりきたり～
美術館はどこへ行く

講師：木下直之

静岡県立美術館館長、東京大学名誉教授



美術の境界線を文化資源の視点でたどり続けた木下氏。「美術館と絵馬堂」をテーマに、開かれた美術館を考えることから始まった。



歌川豊春《観梅図》天明〜寛政期(1781~1801)

企画展「The Ukiyo-e 歌川派」関連ワークショップ&レクチャー

The Ukiyo-e

歌川派—豊春から国芳、広重まで

2019年9月20日(金)~10月27日(日)

前期 9月20日(金)~10月6日(日)

後期 10月8日(火)~10月27日(日)

本展は、浮世絵史上、最大の画派として栄えた「歌川派」の代表的な絵師を集める企画展として開催した。特に、歌川派の開祖・歌川豊春(1735-1814)を大きく取り上げた。豊春が画業初期に手掛けた「浮絵」と呼ばれる西洋の透視図法を取り入れた風景版画や、円熟期の天明年間(1771~89)以降に制作した優美な肉筆浮世絵を特集した。この開祖・豊春を筆頭に、その優れた弟子として歌川派の中興を担った豊国と豊広、さらにその門下から出て傑出した才能を示し、幕末の浮世絵界をリードした国貞、国芳、広重、また同派のライバルでもあった北斎や歌麿の紹介も含め、美人画(肉筆含む)、役者絵、武者絵、風景画など、さまざまなジャンルの浮世絵、約150点で構成し、歌川派の卓抜なデザインや華麗な色彩に注目しながら、その美的特質をじっくりご覧いただいた。

企画の柱となったのは、開祖・豊春の作品の魅力だった。豊国や広重、また近年海外でも人気の高い国芳の陰に隠れて、ほとんど注目されることのなかった豊春に光を当てたいと思ったのがこの企画の発端だった。特に豊春は、肉筆(自筆)の浮世絵美人画を得意としていて、美人の姿態や着衣の造形表現において、超絶技巧と言ってよいほどの高い技量とすぐれた色感を見せてくれる。2年間ほど作品調査をして、4点の豊春の新作に出会い、本展に初公開できた。また昭和初期に、豊春が元々は臼杵藩の御用絵師であったという説が提唱され、今でも有力な説と考えられている。臼杵の郷土史家、故・久多羅木儀一郎氏の説だが、今回、臼杵の関連史料にあらためて目を向け、その可能性が十分に考えられることを実感した。豊春の臼杵出身説を決定的に裏付ける史料に出会うことができれば、またさらに一歩進めた新しい浮世絵展を企画してみたい。

担当学芸員 宗像晋作
大分県立美術館 学芸企画課 主任学芸員



歌川豊春《二美人図》(松風村雨図)
天明〜寛政期(1781~1801)

見るワークショップ 頭と身体のギャラリーツアー@歌川派

宗像晋作(展覧会企画学芸員)×榎本寿紀(教育普及)による即興トークのギャラリーツアー。企画展「The Ukiyo-e 歌川派」にあわせて実施した。ある時は解説を聞き、ある時はポーズを真似、またある時には移動式教材ボックスの資料を見ながら進む。歌川豊春が遠近法を使って描いた作品では、その原画と思われる画像を視る。また浮世絵に使われていた紅花や藍、その他の色材を、教材ボックスから視る。細密に描かれている作品では、虫眼鏡を出す。豊国の役者絵では二人で同じポーズをして参加者もそれを真似、国貞の《猫背猪首美人》でもその微笑を真似る。広重ブルーを豊後牛からつくった、教材ボックスのブルシャンプルーは必見。肉筆画のコーナーでも教材ボックスの鉱物見本が活躍した。このギャラリーツアーは打ち合わせなしの完全即興。参加者のリアクションやリクエストで、どんどん変わる。最後は双眼鏡で肉筆画のディテールを楽しんだ。





江戸トリップ

企画展「The Ukiyo-e 歌川派」にあわせて「みんなの土曜アトリエ特別バージョン」を2週にわたって開催した。展示室に行く前の準備として、まずは身体と感覚を活性化する。1週目は「ふわもこギャラクシー」、翌週は「ころころピンポン」を行った。展示室入口で歌川豊春《観梅図》のポーズをみんなで真似る。これをきっかけに会場内では浮世絵や肉筆画と同じポーズをとることで、作品の細部までじっくり見た。版画の彫り方、刷り方も気になる子どもたち。作品数が多いので、一度解散した後、希望者は延長して見た。



1010 講座 番外編

歌川派の開祖・歌川豊春♡



企画展「The Ukiyo-e 歌川派」の企画を担当する宗像晋作主任学芸員によるレクチャーは、看板に偽りあり?と自ら言いながら、マルセル・デュシャン以降の現代美術の話から始まった。「作品の楽しみ方は、浮世絵も現代美術も同じ」という宗像学芸員。歌川豊春については少しだけ触れ、「夜のおとなの金曜講座」に続くことになった。

夜のおとなの金曜講座 番外編

歌川派の開祖・歌川豊春☆



宗像晋作主任学芸員による「The Ukiyo-e 歌川派」のレクチャーの続き。豊春白杵出身説について、熱く語った。

浮世絵に見る色材の魅力— 透明と不透明

浮世絵に使われている色や絵の具は、どんな材料からつくられている? 元目黒区美術館学芸員で色材文化を研究しているフリーランスキュレーター降旗千賀子氏によるレクチャー。露草、紅花、藍、藤黄、そして弁柄、辰砂、藍銅鉱など、浮世絵の色材の画像を見つつ、透明(水に溶ける染料)と不透明(水に溶けない顔料)の観点から行った。染料系は透明で、紙の繊維に染み込むため、描かれたモチーフと一体感はあるものの退色しやすい。一方、顔料は不透明で接着成分である展色材が必要となる。江戸時代の絵師たちは、これら染料と顔料を使い分け、色彩溢れる世界を描いていたのだ。色材に注目して浮世絵を見ると、楽しさがまた広がる。



降旗千賀子 (フリーランスキュレーター)

目黒区美術館で、美術を素材や原料から見るための「画材と素材の引き出し博物館」を、美術館ツールとして企画。『色』の博物館というシリーズの展覧会とワークショップに発展させた。これまでに「青—永遠なる魅力」「赤—神秘的謎解き」「白

と黒—静かな光の余韻」「緑—豊潤な影」「黄色—地の力と空(くう)の光」を企画し、2016年には「色」の博物館—江戸の色材を見る・読むを開催した。OPAMでは「色をめぐる7つのお話 其の五 色の博物館をめぐる」に続いて2回目の登場。



美術館って どんなところ？

シーンと静まり返った展示室。中に入ると少し寒く感じ、薄暗くも思える。なぜ明るくしないのだろう。「静かにしてください。他のお客さんの迷惑になります」。少しでも話そうものなら、すぐに注意を受けそう。静寂な空間は、なにやら神聖な雰囲気も漂う。絵の前に佇むと不思議と心が落ち着く。いつもと異なる非日常的な空間。美術館は敷居の高い場所なのか、それとも特別な場所なのか。

美術館は、美術作品を中心に、文化遺産を収集、保存、調査、研究、展示を行う。1872年、東京・湯島の文部省博物館主催による美術工芸品の展示が初めてとされるが、古くは社寺が所蔵する宝物を開帳する習慣が美術品観覧の場となり、また見世物小屋も、珍しいモノや作り物を観覧する場となっていた。美術館の歴史を見ていくと、「保存」を大事にしていた第一世代から、一般の人に「公開・展示」することを大事にした第二世代、そして第三世代のキーワードは「参加・体験」。今は第二世代から第三世代へ移行している段階だという見方もある（長崎県美術館館長 米田耕司氏）。そんな美術館だが、そこには実物がある。だからこそ、美術館を訪れたい。

2015年春、様々な視点、感覚を通じて、感性や創造性に訴え、訪れる人が五感で楽しむことができる美術館を目指して、大分県立美術館（以下、OPAM）は開館した。ホームページにも掲載しているが、OPAMは大分と世界、古典と現代、美術と音楽など、様々な「出会い」をテーマにした企画展を開催し、新たな発見や刺激を発信してきた。美術館というと、なにやら高尚で敷居が高いイメージを持つ人も少なくない。そこで来館者が自宅のリビングルームと感じられるような、気軽に立ち寄れる美術館を目指している。さらに次代を担う子どもたちから高齢者まで、すべての年齢層の人たちと一緒に成長する美術館を目指しているのだ。

時代の変化とともに、社会も、教育も、美術も、美術館も変化してきた。OPAMはこれからどこへ向かい、どんな美術館を目指すのか。教育普及の活動は、これからどう展開してゆくのか。5周年を迎え、今までの美術や美術館のことを、今一度、再確認しながら、美術館の未来像について考えたい。

OPAM教育普及の 「びじゅつって、すげえ！」

美術館の教育普及は何をすべきか。大切なのは「自分の視点」を持つことだ。開館準備室時代から、その考えのもと、様々なワークショップを実践してきた。そして美術教育、美術館教育において大切にしたい思いを記録読本「びじゅつって、すげえ！」に記してきた。

美術館はどんなところか。ごく簡単に言うと、作品が展示しており、それを見に行く場所だ。美術を学ぶことが好きな人、あるいは高尚なイメージに憧れや興味を持つ人もいるだろう。中には、見に行く＝鑑賞という少し硬いイメージを持つ人もいるかもしれないが、美術とは美しいモノを美しいと感じる心であり、それは生きる力を強くする。より多くの人に美術館を訪れてほしい教育普及グループは、美術館には遊びに来てほしいと思っている。そして“見る”から“視る”へと視線が能動的になる、つまり「自分の視点」を持つことができれば、作品を視るのが楽しくなる。

“見る”から“視る”へと誘うために、「頭と身体のギャラリーツアー」や、子どもが親に作品について話す「ねえねえ、あのね」、「すてきな三人組」「カオカオミュージアム」など、ギャラリーツアー形式による“視るワークショップ”を開催してきた。そこでは「こうやって視よう!」という具体的な楽しみ方も伝える（詳しくはⅡ「学校と、いっしょ」編「コレクションから活動を振り返る」の中の「コレクションの見方・楽しみ方」参照）。そして美術館が驚きと出会う場所となるように、より身近な存在である植物や音、身体や感覚をテーマにしたワークショップを開催し、身近なモノから感性を刺激してきた。美術館で徹底的に楽しむ。こうしたことを続けていくと、美術館は学びの場ではなく、遊びの場として身近な存在となる。

美術館をめぐる 7つのお話

ここでOPAMだけではなく、他の美術館についても見てみたい。

開館初年度から連続ワークショップ・レクチャー「7つのお話」シリーズを開催していることは、「5年間の歩み」（p3-4）でも触れた。内容は美術に限らない。美術は他分野を結ぶことができる。教材ボックスや情報コーナーの書籍も様々な分野のものを集めている。そして7つのお話シリーズでも、他分野かつ多分野の人たちを招聘してきた。そんな中で、今年度は「美術館」を取り上げた。

時代が変わりつつある今、企画展はどうなるのか？美術館は成り立つのか？行政と学芸員の関係は？美術館で企画運営に携わる人から、美術館の役割や今後の展開について話を聞きたい。展示会の企画に関わる学芸員から館長まで、それぞれの立場から理想と現実に触れ、これからの美術館、これからの展覧会、未来の美術館像について考えていくことを企画し、「美術館をめぐる7つのお話」は始まった。

トップバッターは、前OPAM副館長で、現在は佐伯市に今秋オープンする「さいき城山桜ホール」の開館準備に忙しい加藤康彦氏。「アートが変わった 美術館の変わる日」と題したレクチャーは、私がインタビュー形式で話を振りながら、それに答えていただく形で進化した。OPAMが生まれる前の大分県立芸術会館時代から長年、大分県の実術と美術館を見てきた加藤氏は、アートを専門家だけが話す時代ではなくなったという。そして美術館の役割がそもそも変わってきたのではないかと。今後は著名な作家の作品や名画を持ってくるだけではなく、市民が主役の文化施設となり、それをどう面白がるかが大切であり、そのためには日常の美術館、普段使いの美術館でなければならないという内容だった。

福岡県立美術館から高知県立美術館に移り、今は九州を中心に美術館の活動史を調査・研究している川浪千鶴氏には、「美術館はどこから来たのか、美術館は何者か、そしてどこへ行くのか」というタイトルで、日本の美術館の歴史、そして地域社会におけるアートと美術館の関わりについて話を伺った。印象深かったのは、被災した地域で再開された美術館が、「美術館を美術館として開ける」「私たちは再開を許された美術館です」と発信している、これはその美術館が被災以前にいかに地域に貢献してきたかということであり、そのような美術館こそが地域におけるアート活動には大切だ、という話だった。

1952年に開設したブリヂストン美術館は、ビル老朽化のために改築し、アーティゾン美術館と名前を変えて2020年1月に再開館した。研究、展覧会、そしてラーニングプログラムも、実業家・石橋正二郎氏が集めたコレクションが核となって展開されている。「コレクションに耳を澄ます ブリヂストン美術館からアーティゾン美術館へ」と題し、このコレクションについて、教育普及部長の貝塚健氏に話を伺い、鑑賞プログラム「コレクションに耳を澄ます」のライド上映を行った。

大分市美術館館長の菅章氏は、作家活動、美術教員を経て、美術館にかかわり始めた。多くの美術領域を横断してきた菅氏による「街・人とアート 美術館の役割」は、他の講演ではしていない子どもの頃の話、作家活動をしていた頃の作品、美術館で仕事をする中で出会った様々な人など、菅氏の個人史から始まり、美術館の仕事、アートを取り巻く様々な人、学芸員の仕事、そして美術館での企画、関わったアートプロジェクトについて話を伺った。

ハラ ミュージアム アークは東京都品川区にある原美術館の別館として1988年、群馬県伊香保に開館し、国内外の現代美術を中心とする個人コレクションの中から様々な企画展を行っている。2008年には書院造を参照して設計された特別展示室「観海庵」を増設し、東洋古美術を現代美術と一緒に展示する。これら所蔵作品と建築について、同館館長の青野和子氏に「現代美術の楽しみ方」として話を伺った。この美術館の特別な楽しみ方は、週末に行われる開架式収蔵庫の見学だ。収蔵庫は作品の保存・管理のため温湿度が一定に保たれ、通常は学芸員以外、入ることができない。ところがここでは、その収蔵庫に入り、間近で作品を視る機会があるのだ。大分県から群馬県は遠すぎるが、ぜひとも行ってみたい。

第一世代の美術館は「保存」。第二世代は「公開・展示」。第三世代は「参加・体験」。「今はまだまだ第二世代と第三世代の移行期」と言う長崎県美術館館長の米田耕司氏によるレクチャー「第三世代の美術館とこれから」。美術館に来る多くの人たちは、子どもの頃に美術館を訪れたことがあるというアムステルダム国立美術館の事例や、美術館で絵を見ていて自殺をやめた人の話などが印象的だった。そして長崎県美術館は、大分県立美術館よりも先に、ほっとする場であり、勉強しなくてもよい、リビングルームとしての美術館を目指していた。「第四世代は楽しい美術館でマイ美術館」と米田氏は言う。

最終回の講師は、美術館から博物館、さらに大学へと渡り歩き、美術の境界線を文化資源の視点でたどり続けてきた木下直之氏。3年前に再び静岡県立美術館の館長として美術館の世界に戻ってきた。美術とそうでないものの境界線の話、美術館と絵馬堂についてOPAMの折戸開放を手がかりに、作品とつくりものについて別府市の浜脇薬師祭りを手がかりに、彫刻と人形について朝倉文夫と国東半島・ゴームリーを手がかりに語った。大分県ならではのモノや話題に触れながら、これからの美術と美術館を考えさせられるレクチャーとなった。

「美術館をめぐる7つのお話」を終え、他館の状況や考えも少しわかってきた。「美術館あるある話」とてもいうような、他館でも聞かれる問題にも触れつつ、美術館のこれからを改めて考えてみたい。

これからの 美術館

榎本寿紀
Toshiki Enomoto

え？ 写真ダメなの？

開館以来、「美術館では写真を撮ってはいけないのですか？」という質問が多い。全国の美術館でも同様の質問があり、来館者を誘う美術館にとって、この撮影問題は大きい。写真を撮る。それは思い出として記録し、どんな作品を見たか確認するための場合もあれば、インスタ映えするからとSNSで発信するのを目的にしている場合もあるだろう。それによって情報が広がり、実物を見に来る人も少なくない。個人の楽しみだけなら撮影は可(ただしSNS等に上げるのは不可)という美術館もあれば、数点限定で可にする館もある。撮影可能な美術館や展覧会が増える一方、それを報じないように求める作家もいる。

美術館はリアルを大切にしている。本物がそこにあるということだ。そこでは空間と雰囲気も重要になってくる。それが本物を視るという快楽なのだが、バーチャルを見て育った人は、そもそも美術館に期待しないのかもしれない。「本物を見てどうするのですか？」という質問すらありえるかもしれないのだ。ネット上には大量の情報が流れる現代、美術の最も根幹と言ってよいのは「実際に見ること」であるが、それが軽んじられているのではないか。先入観なく、視ることを楽しむために来てほしいと望むのは、難しいのだろうか。OPAM教育普及のワークショップでは、視ること、遊ぶことに集中してほしいので、講座中での撮影は我慢してほしいと参加者に伝えている。場合によっては、講座終了後や、途中で撮影タイムを設けることもしている。

美術館には なぜ行く？

写真撮影を例にとってみたが、つまり美術とは何か、という根幹の問題に関わるのかもしれない。「昔は床の間を家庭美術館と言っていた」とは、米田氏(長崎県美術館館長)の話だ。雪ウサギ、シャボン玉、花火など、はかなく消えゆくものが美しいと感じる感性、つまり無常観が、日本人には潜在的にある。絶えず移ろう自然への思いがある。それが美意識というものだ。しかし今や居住空間もライフスタイルも変わった。「時代の変化とともに、美術という言葉に加えてアートという言葉が一般的に使われ、さらにアートを専門家だけが話す時代ではなくなった」というのは、加藤氏(佐伯市大手前開発推進室参事)だ。身の周りを見回すと、生活の中でデザイン・工芸が必要とされ、アートが生活に近くなっていることに気づく人は多いだろう。今は誰でも絵が描ける時代になり、アートは福祉にも近くなっている。生活の中でデザイン・工芸が主流となりつつあるということは、同時にアートの権威がなくなり、時代がアートというくくりを必要としなくなってきたのではと思うこともある。そうした時代の流れと並行して、多くの美術館が開館し、美術館のあり方、展覧会のあり方も、変化しているのではないだろうか。

こうした世の中の変化とともに、美術館には本物と向き合うだけでない、別の目的が求められる時代になってきている。従来の展示だけでは観客がついてこないため、現代社会に対応する展示にすべきかもしれない。かといって、マンガやアニメの展覧会も流行りで終わるだろうし、イベントを行うのも違う気がする。そうした中、教育普及としては、美術館や作品をどう面白がるか、そのきっかけ作りは行いたい。つまり開館前から教育普及で行っている「自分の視点を持つ」ということだ。

子どもの頃から 美術館

子どもの頃に美術館に来たことがあると、大人になってからも美術館に来る。先の米田氏の話について、もう少し詳しく触れたい。アムステルダム国立美術館レーウ館長によると、美術館に来ている大人の大半は、子ども時代にも来ていて、家族連れのおとなの87%が子どもの頃に美術館に来ていた人たちだったという過去50年のアンケートがあるという。これは私が前職の目黒区美術館時代に経験したことに近いと思われる。ワークショップに参加していた子どもたちが、大学生や一般社会人になった後、再び美術館を訪れ、手伝っているのである。私は彼らを、親しみを込めて「シャケ」と呼んでいるのだが、今では私の代わりにボランティア・グループ「めぐろ・アソビ・探検隊」を結成し、ワークショップを企画・運営している。こういった話は他館でも聞く。美術館に来たことのある子どもたちを増やしたいのは、全国の多くのエドゥケーターの望んでいることだろう。

さてOPAMは開館5年がたって、少しずつではあるが、子どもだけで美術館に来る姿も増えてきた。「みんなの土曜アトリエ」で展示室に入るときには、入口で係の人に「こんにちは」と元気よく挨拶して入る。係の人も笑顔で返事をしてくれる。みんなてワイワイ3階に行くことの特別感が楽しいらしい。ということは、まずは美術館で行う活動が面白いから、楽しいから来る、ということが続ければ、将来にも続くということだ。今来ている子どもたちが大人になって、今度は自分たちの子どもを連れて美術館に来てくれる日が待ち遠しい。

美術は 楽しいから

長崎県美術館や大分県立美術館がリビングのような美術館を目指すように、美術館は居心地の良さを求められてきた。そしてアートが身近になるとともに、楽しさも求められてきた。しかし美術館に子どもの歓声が聞こえてくるから楽しい美術館というわけではない。では、楽しいとはどういうことだろう。

木下氏(静岡県立美術館館長)が連続講座の最後に言った。「もしも美術館がなかったとしたら、と想像してください」。美術館はなくてもよいのだろうか。あった方がいいのだろうか。どんなに仮想現実の技術が進歩しても、実物と向き合う場所がなければ、作品を体感することは不可能だ。実物と出会うことのできる場所が極端に少なくなってしまう。しかし日常の中に溶け込むように、美術館を作品の器としてではなく、自分の生活をデザインするためのツールとして考えれば、美術館の見方も変わるだろう。

美術館に来て作品を見ていたら、いつのまにか自殺を思いとどまった人がいるという。心を奪われ感動することがある。作品を見ることが心の糧となる。美術館は静かにいろんなことを考えることができる場所である。時代の変化とともに美術館像は変わるが、今こそ美術そのものの力に立ち戻ってみたい。没頭する時間。日常を忘れる時間。それは集中して美術の世界に入り込む、癒しの時間である。だからこそ、普段使いの美術館として広く認知される必要があり、そこで心安らぐ時間を増やしたい。美術館は敷居の高い場所でもなく、特別な場所とも少し違う。そんなことをも含めて、より多くの人に美術館は楽しいところと発信し、美術館の存在を共有したい。開館5年の活動を経て、あらためて初心に帰り、美術の楽しさを伝えていきたいと強く思う。

OPAMって、 どんなところ？

絵・野上智美

さかながいますよー

どこどこ？

美術館って、どんなときに行きますか？気になる展覧会があるとき。家族や友達
の作品が飾られるとき。子どもたちは学校の授業で行くこともあるでしょう。行った
ことがない人もいます。

初めて行く場所では、緊張したり、落ち着かないこと、ありませんか？大分県立
美術館（OPAM）の教育普及では、展示室に入る前にまず、美術館に慣れて
もらうために、館内をめぐったり、アトリエで身体を動かしたりして、感覚を活性
化するプログラムを行なっています。そうすると、少しずつ肩の力が抜けて、ゆっくり
と視界と想像が広がっていきます。

その前に、美術館で守ってほしい3つのお約束をします。

1 走らない。人や作品に傷つかないでいたいからです。

2 作品に触らない。
触ると壊れてしまったり、一見わからなくても、年月が経つとシミ
になったりすることがあります。高価だから触ってはいけないのでは
ありません。この世でたったひとつの、誰かが一生懸命につ
くったものを傷つけていいのでしょうか？美術館にはみんなに見て
もらう役割と、作品を保存する役割があります。10年後、100
年後も見てもらうために、みんなの協力が必要です。

3 大きな声を出さない。
静かに美術館を楽しみたい人もいます。
だけど、感じたことはたくさんお話ししましょう。
でも、迷惑にならないように小さな声でね。

ちいさなこえで
はなす

野上智美

Tomomi Nogami

大分県立美術館 学芸企画課 教育普及
ワークショップ・アシスタント／事務職員

紅花栽培継続中。いつも春にタネをまいて、
まだ一度も花を咲かせることができていないので、秋まきに挑戦。
順調にぐんぐん育っているので、春になるのが楽しみです。

教育普及的OPAMの楽しみ方を紹介します。



では、まずはウォーミングアップ。

1階 アトリウム

吹き抜けの高い天井は解放感があり、広い空間
に来ると子どもたちは思わず走りたくなってしまいま
す。そんなアトリウムを見渡してみると、見当たらない
ものがあります。一般的には天井にあるもので
すが、何かわかりますか？それは空調設備です。実は
OPAMの空調は床にあります。足もとのパネルの隙間に手をがざすとわずかに
風を感じます。

一際目立つ大きなたまご型のバルーンは、マル
セル・ワンダースさんの触れる作品です。おも
りが入っていて、起き上がりこぼしの仕組みで
ゆらゆらと揺れます。遠くから揺れる様子を見
たら、近づいてみる。約5メートルのバルーンは
間近で見るとどうかな？倒れて覆いかぶさって
きそう、怖い！つい面白くて思い切り押して
揺らしたくなりますが、これはおもちゃではなく
作品なので、やさしく触ってください。また少し
離れて見る。「なにか顔のように見えな？」
「あれ？サングラスをかけた犬がいる！」。いろ
んなものが見えてきます。もう一度近づいてみる。
作品の表面にはいろんな柄がプリントされて
います。お花や昆虫、いくつ見つけられるかな？色違いもあるよ。目をつけて、音を
聞いてみる。どんな音が聞こえるかな？



かお
みえる？



アトリウムにやさしく光るシャンデリアのような
須藤玲子さんの作品は、水草をイメージし
てつくられました。頭上に浮かぶ作品が水草
なら、1階を歩く私たちは水の中？鼻下から
見上げるとどんなふうに見える？

ミヤケマイさんのプール型の作品は、中に入
ることができます。入るときは靴を脱いでね。
覗き込んでみよう、水の中に何か見える？泳
いでみよう、誰が一番かな？水面に虹の
輪っかが見えるかな？



あたまに
のてる？

2階

OPAMを設計した坂茂さんらしい、建築の特
徴のひとつである紙管が一番多く使われている
のが2階です。紙管ってわかる？ラップの芯みた
いなので、ここに使われているのは建築資材と
して加工されたものです。レストラン、情報コー
ナー、よく見て、探してみよう。どこに使われてい
るかな？

そして、2階から1階を見てみよう。1階では見え
なかったものが見えてくるかも。

遠近法をつかって楽しめ



3階

ガラスで囲われた、空に抜ける「天庭」に
は、徳丸鏡子さん、磯崎真理子さん、高
橋禎彦さん、3人の作家の作品が展示さ
れています。このお庭には残念ながら出るこ
とができません。作品の近くには行けない
けどよく見てみよう。ビー玉が重なってつけた
ような作品。お花や野菜に見える作品。何
でできているのかな？炎のような作品もあるよ。
ぼっかりと楕円に開いた天井から、晴れた日は青空と流れてゆく雲が見えます。
吹きぬけなので雨が降れば作品は濡れて、また違う様子になります。滅多に雪
は降らないけれど、雪景色も素敵です。



天井を見てみよう。竹籠の中に入りたい？三角形と
六角形、星の形みつけた。床も見てみよう。日田石の
床には模様があるよ。ハート型の模様を5つ見つけろ
と願いが叶うらしい。その模様、真上から見る？少し
横から見るとこれもハートに見える？いろんな角度から見
てみよう。

さて、身体はほぐれたかな？
では、展示室に行きましょう。

子どもは自由にのびのびと素直に作品を見るので、
大人が思いつかないような面白い発想をして、驚
かせてくれます。旅人を模した60cmくさりの背丈の
木彫作品を見て、幼稚園の女の子が「チョコレート
みたい」と言うのです。そう言われると、チョコレート
でできているように見える。どこから食べる？頭から、足から、手に持っている瓢箪か
ら。甘いかな、少し苦い？よく見て、想像を膨らませます。

土曜アトリエに親子で参加した方が、その夜、寝る前に、「今日何が一番楽し
かった？」と5歳の娘さんに聞くと「朝顔の作品を見たのが楽しかった」と答えた
そうです。土曜アトリエは、1時間アトリエで身体を動かしたり、作品をつくったり
した後、展示室に作品を見に行く90分プログラムなので、どちらかというとアトリ
エで遊んだ記憶のほうが強くなりそうですが、お父さんいわく、「家で朝顔を育
てていたから、身近に感じたのかも」とのこと。「つばみ、どこだ？」「種になっ
てるの、どこだ？」。みんなで朝顔の作品を見るとき、
そんな問いかけをしますが、その植物を育て、
知っているということが、作品を見る楽しさに
繋がったのかもしれない。



大人も子どもも、みんなで見るという楽しさに気づかれ、別の視点からモノを見
るきっかけになります。世代を超えて、楽しさを共有できる、そんな時間と場所を
つくっていったらと思います。

OPAMサポーター教育普及グループ活動

Group Activity

教育普及グループの活動はサポーターの力で成り立っている。今年度は新メンバーも加わり、活動が勢いづいた。「みんなの土曜アトリエ」では、作品に触れないようにという見守り隊の活動が心強い。毎月の活動日には素材に触り、あれこれ試作する。これは楽しい、これは難しい、と参加者の立場に立ってワークショップの進行を一緒に考える。

4月

教育普及グループにはワークショップ班、図書班、顔料班があるが、基本的にはどの活動にも参加してほしい。4月の1回目は自己紹介。特技やマイブーム、好きな食べ物、動物、色などを聞く。2回目は教材ボックスから顔料を紹介し、つくり方（砕き方・すり潰し方・漉し方）をレクチャー。粉塵が舞うため、実際の制作はアトリエではなく倉庫で行う。こうして少しずつ顔料は増えてゆく。



5月

みんなの土曜アトリエ「もひやもひやの森」の準備と実験を行った。ハレバネの紙をはがしてハサミでも切れるようにする。ワークショップでは、これを細長く切って天井からぶら下げ、森のようにする予定。地味で大変な作業だが、こうしたサポーター活動によって、ワークショップが実施できる。光をあてて影をゆらす実験も行った。



6月

特別ワークショップ「アトリエむ遊園地」で行う「踊るペーパーモビール」の試作品づくりを行う。手をトレースして切り抜き、つなげて吊るす。続いてアトリエ・ミュージアムで行う企画展「ムーミン展」に関連した「ステキなお団子頭」の試作品を制作。さらに夏の「びしょぬれワークショップ」のためビニールシートを広げ、イメージ・トレーニングを行った。



7月

テントの組み立てテストを行う。これで汚れても着替えは大丈夫。屋外ワークショップで荷物や道具を置くベースになる。そして「踊るペーパーモビール」の試作品づくり。ワイワイおしゃべりしながら行うが、実はこのときの話が、材料や道具、つくり方の説明を検討するのに大変重要だ。「アトリエむ遊園地」当日、次から次へとやってくる子どもたちに材料やつくり方を教えた。



8月

ファミリーワークショップ「踊るアニマル・ハンド・パペット」の試作を行った。真剣に制作し、可愛い動物たちがたくさんできた。この真剣さが大切。そしてハンドカーターよりも数倍速い電動カード機を使って羊の毛を整えた。これで今後のワークショップ活動が広がるだろう。



9月

コレクション展「OPAMアニマル★パラダイス」にあわせたワークショップで、アトリエに動物たちの楽園をつくるための準備。木っ端の積み木や積み石、竹積をならべ、色紙で森、ジャングル、川をつくった。翌日のワークショップでは動物をつくって並べる予定。子どもたちの笑顔が楽しみな。



10月

アウトリーチのワークショップで行う「アクションペインティング」の準備。小さなボトルにポスターカラーと水を入れて溶かす。数か所で行うため、数も多い。色数、ボトル数が増えるとみんなのテンションも上がってきた。



11月

今後の新しいワークショップのための実験。ワークショップで積んだコップの壁に映像を投影した。乳白色のビニール風船にも投影する予定だったが、コップの積層に夢中になって時間いっぱいになり、延期。電動カード機で羊毛のカーディングの説明も行う。この羊毛を使ったワークショップ「MOFUMOFU♡ひつじ100%とまみれる」は2月に開催する。



12月

「びじゅつかんの旅じたく」で行う新ワークショップの実験と準備。できない、難しい、大変、でも面白い、と口々に出てしまう。ワークショップのプログラムは、手を動かしながら考えることが一番大切だ。



情報コーナー

Book Gallery

2階アトリエの横にある情報コーナーは、「目で楽しむブックギャラリー」として約4,000冊の蔵書の中から書籍を選び、開架している。書籍は美術、デザイン、工芸の他、写真、建築、民俗、身体、音楽など様々な分野からなる。絵の具の素材となる鉱物や植物の図鑑、自然科学、大分の生活、日本人の心など独自のテーマで選書しているため、どちらかというと美術書よりも、好奇心を触発するための絵本や図鑑が多い。この美術書が読みたい、と目的を持っての来館は、残念ながら難しいかもしれない。美術書が少ないのは、展示室で実物を見てほしいという思いもあるからだ。定期的に入れ替えを行っているので、本のタイトルや表紙を見て新しい本と出会い、知らない世界へ一歩踏み出すきっかけにしてほしい。また企画展や講座ともゆるやかに連動するように、毎年新しい書籍を購入している。今年度は、企画展「ムーミン展」「The Ukiyo-e 歌川派」「岡本太郎展」関連の書籍や、夏の特別ワークショップ「手で語る」の講師、小川信治氏の展覧会カタログ、「美術館をめぐる7つのお話」講師、木下直之氏の著書などを開架し、展覧会に来た人やワークショップ参加者に好評だった。

本棚には建築家・坂茂氏の特徴の一つである建築素材・紙管が使われている。紙管というとトイレトーパーやラップフィルムの芯などが思い浮かぶかもしれないが、建築素材として加工したものを使っている。この本棚と木の椅子やテーブルが並ぶ空間は、現代美術の蒐集家・利岡誠夫氏から寄贈されたコレクション作品、そしてHands on Worksの作品などを展示し、ミニギャラリーとしても楽しんでもらっている。



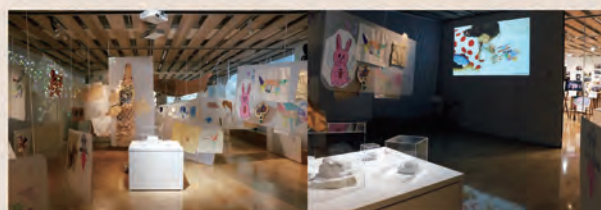
教育普及グループ活動展示

Activity and Display

毎年、年に数回、教育普及グループの活動展示を行っている。
これらの展示を見て「面白そう」「私も参加したい」と思う人たちが増えてほしい。
また記録写真で、子どもから大人まで、元気と笑顔いっぱいの姿を見てほしい。

びじゅつって、すげえ！ 2018-2019 この1年の進化と深化

毎年4月は前年度の活動を紹介している。その年の特別講座をメインに、みんなの土曜アトリエ、アトリエ・ミュージアム、1010講座・金曜講座の写真を展示する。昨年度の活動からアウトリーチ、「Hands on Works」の作品とそれを使った「触ると触れる」、そして年度末の最後に行った彫刻家・佐野藍氏による「幻獣ラビリンスへようこそ」のワークショップから、子どもたちの描いた幻獣による迷路を、佐野氏の彫刻とともに再現展示した。



夏の特別ワークショップ 「手が語る」記録展

夏に開催したワークショップから、岡田美佐子氏、盛田亜耶氏、小川信治氏を講師に迎えた3つのワークショップを主軸に展示。岡田氏のレクチャーで使った手の骨格模型、盛田氏のワークショップでつくったたくさんの手形、小川氏の即興ドロ잉を写真と併せて展示した。そしてこどものワークショップから石膏型取りの手、ファミリーワークショップから動物のパペット人形とコマ撮りアニメーション、大人の講座からはシルエットパズルや組み合わせオブジェ、そして「Hands on Works」からは手で作ったとは思えない超絶技巧の作品が並んだ。



活動展示～ 見せます！教育普及の“器”たち

教育普及の持っている教材から、いろいろな器を紹介した。日本的な吉祥柄をモチーフとした現代的なデザインの豆皿、飛び鉋や刷毛目、櫛描きなどによる幾何学的紋様を特徴とした大小さまざまな小鹿田焼、イチョウ、ケヤキ、ヤマザクラなどを使った時松辰夫氏（アトリエときデザイン研究所・由布市）の木の器やスプーン、プロダクトデザイナー小松誠氏のクリンクルシリーズだ。小松氏のクリンクルは紙の質感を表現した磁器。やわらかそうに見えるしわくちゃなデザインで、ニューヨーク近代美術館にもコレクションがある。教育普及にはクリンクルの、紙でつくったオリジナル、石膏原型と雌型、そしてそこからつくられたプロトタイプがあり、制作道具と一緒に展示した。

これらの器を入れる「器のための器」は高野家具製作所（由布市）によるもの。4つのおもちゃタイプの箱型で、中には大小さまざまな大きさの小箱が設けられている。この器のための器に、前出の器を入れ、中学校と小学校で鑑賞ワークショップを行った。その際、子どもたちが制作した紙の器と一緒に展示した。



今年度のトピックス

Topics

小川信治の円空プロジェクト～ ワインボトルのエチケットに描く

ワインボトルのエチケットには様々な絵が描かれている。その絵を見て直観で買う人もいるだろう。小川信治氏は、このエチケットにさらさらっと絵を描く（p38参照）。エチケットへの描き足しはあまりにも自然で、もともと描かれていたのはどの部分なのか、わからない。はじめから全てを小川氏が描いたように思えてしまう。〈Perfect World〉や〈Behind You〉など、彼の無限に世界を広げる想像力を見ていると、その源泉は日常の中に潜んでいる気がしてきた。小川氏の視点で身の回りを見つめていくと、その延長にある世界がすべてつながっているのかもしれない。

この即興ドロ잉は、レクチャーで披露するためのものではない。むしろもっと小川氏の日常に近い。全国各地のワインを飲み歩き、そのお店でさらさらっと即興で描き、店に置いてくるそうだ。題して「円空プロジェクト」。そういえば初めて小川氏に講座の依頼に行った時も、描いていた。なんだか描いている姿を見ると、日常の中に足跡を残すとか、世界に関わるとか難しいことなく、純粋に描くことを楽しんでいるように見える。

小川氏に同行して食事をした際は、彼が描いたワインボトルをいただいで必ず美術館へ持ち帰ることにした。今では教育普及のコレクションは8本となる。今後、このエチケットだけで展覧会を開催してみたい。

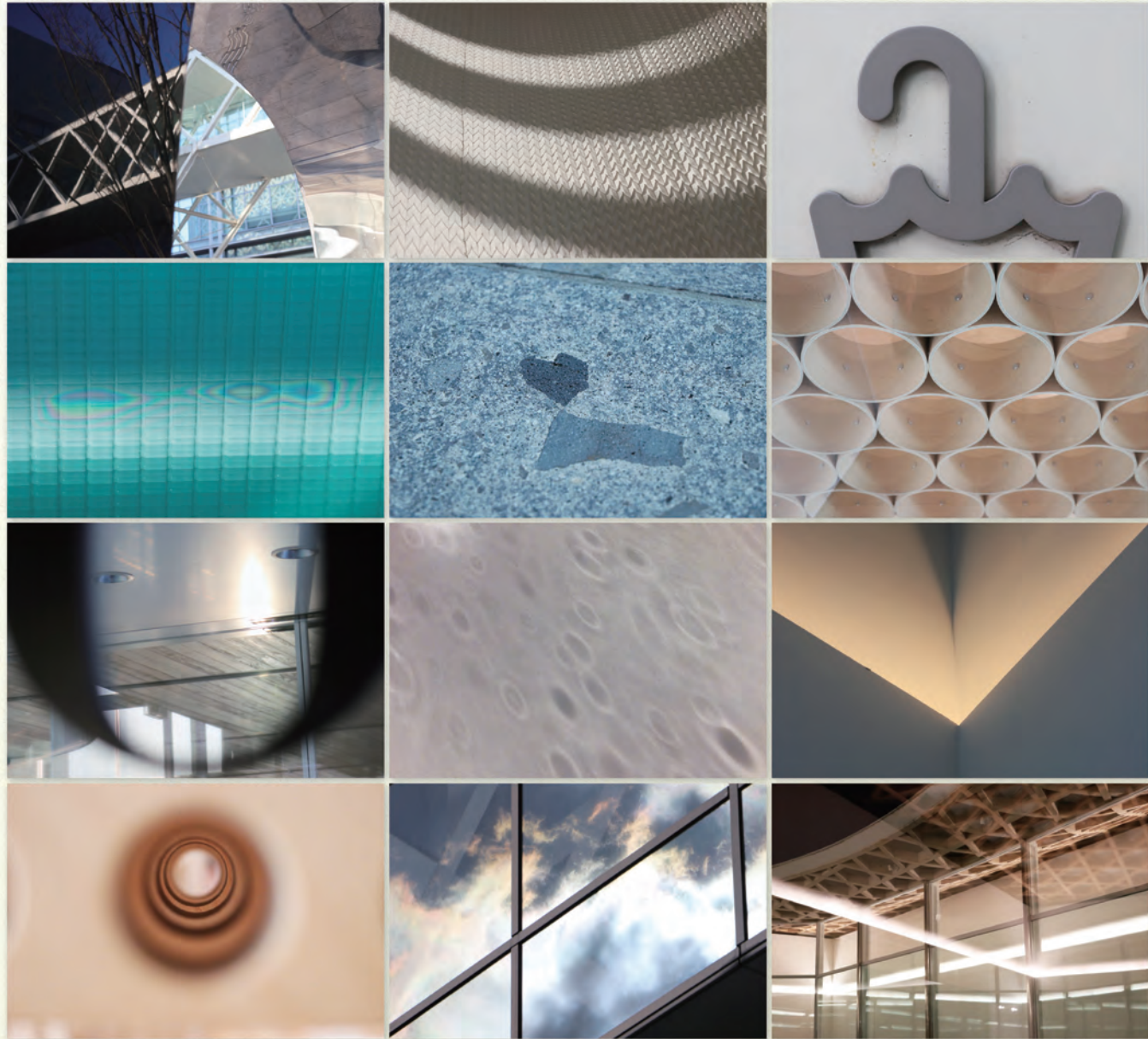


笹色紅づくり

江戸時代に流行った、玉虫色に光る笹色紅。これを大分県で育てた紅花からつくることができるだろうか。公開ラボラトリーで制作を試みた。まずは乾燥した紅花から花びらだけを取り出す。2018年の秋に種まきをした紅花が、春から夏にかけて咲いたものだ。紅花は早朝、朝露が降りた頃に摘むと、手に棘が刺さりづらく痛いという。しかしここではカリカリに乾燥したものを使うので、油断するとすぐに刺さる。この作業だけでも一苦労だ。解体しながら花びらだけをより集めた。

次にサフロールイエローの抽出だ。水に浸して待つだけなので簡単だが、待ち時間、そして繰り返しの作業が多い。水に溶けだす黄色色素を完全に追い出さないと、笹色紅はできないのだ。アルカリを加え、時間を置くことを数回繰り返し、これを染液とする。酸を加え木綿の布を染めると真っ赤になった。さらにこの赤い布を、一度アルカリで還元してから、その液を酸化。とても時間のかかる作業だ。この液をフィルターで濾すと本紅ができるはずだった。フィルターは濃いピンク色になり、天然の色素と思えないくらい鮮やかだったが、一晩経ったら変色して茶色くなってしまった。酸を加えるとまた赤くなったが、今後の研究が必要だ。しかし今年の紅花の量はあまりにも少なく、笹色紅までとてもじゃないが足りそうもない。来年は紅花栽培にもっと力を入れたい。





カメラ片手に、時間と場所に出会う、自分だけのワークショップ。

美術館には面白い形やきれいな色がいっぱいある。

キョロキョロしながら、朝・昼・晩の美術館散歩で

刻々と変化する美術館の「美」のカケラを見つけてみよう。

びじゅつって、すげえ! 2019-2020

I 「楽しい美術館」

企画・制作・発行

アートフル大分プロジェクト実行委員会

事務局

公益財団法人 大分県芸術文化スポーツ振興財団・大分県立美術館

大分市寿町2番1号 TEL097-533-4502

執筆

榎本寿紀 大分県立美術館 学芸企画課 教育普及 主幹学芸員

宗像晋作 大分県立美術館 学芸企画課 主任学芸員

木藤野絵 大分県立美術館 学芸企画課 学芸員

野上智美 大分県立美術館 学芸企画課 教育普及 事務職員

編集協力:ラルゴ 井上裕子

デザイン:ディ・エア 佐々木ツヨシ

印刷:株式会社 明文堂印刷

2020年3月発行

※本誌に掲載した記事・写真・イラスト等の無断転載は禁じます。

 **文化庁** | 平成31年度文化庁
地域の博物館を中核としたクラスター形成事業

アートフル大分プロジェクト実行委員会は、大分県芸術文化スポーツ振興財団(大分県立美術館)、大分大学、大分県立芸術文化短期大学、大分県、大分県教育委員会で構成された実行委員会組織です。国の助成を受け、地域や学校と連携しながら「美術による人材育成」を目的とした活動を行っています。

大分県立美術館教育普及グループ

0505-
P105